河内長野市遺跡調査会報Ⅰ

1989年3月

河内長野市遺跡調査会

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は文化財と自然に恵まれた住宅都市である。

近年の住宅開発の波は、大阪市の近郊として位置する本市にも波及し、開発件数は増加の一途をたどっている。

このような中で、開発がもたらす文化財や自然に対する影響もまた増加している。とくに、地下に眠る埋蔵文化財への影響は避けて通ることのできないものである。このため、開発と文化財保護との調和は重要な課題である。

本市においては、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査の面積が年々増加しており、これに対応するため河内長野市遺跡調査会を設立し、調査を実施している。

本書は河内長野市遺跡調査会が実施した昭和63年度の発掘調査の成果の一部である。

これらの調査を実施するに当たり、関係機関の埋蔵文化財に対する深い理解によるものであり、末筆ながら感謝を表すものである。

平成元年

河内長野市遺跡調査会

理事長　中　尾　謙　二

例　　言

1，本書は昭和63年度に河内長野市遺跡調査会が受託事業として実施した、市内３遺跡の発掘調査報告書である。

2，調査は、本市教育委員会社会教育課文化係尾谷雅彦を担当者として実施した。

3，調査にかかる事務は調査会事務局長釜ケ谷正己が主担した。

4，本書の執筆は遺構が尾谷雅彦、遺物を高田加容子が行なった。

5，編集は尾谷が担当し、本書の文責は尾谷が負うものである。

6，発掘調査及び内業整理については下記の方々の協力を得た。

明地奈緒美・乾利夫・喜多順子・久保八重子・田中美知代・阪本桂子・谷健二・中西和子・中野雅美・中村清美・中村登美子・平井令子・福田昌弘・松尾寿美子

7，調査の実施に関しては下記の方々の協力を得た。

市都市整備部地域整備課緑化公園係・壺山建設・島田組・国際航業・写測エンジニアリング・出光興産株式会社

目　　次

序　　文
例　　言
はじめに…… 1

烏帽子形城

1．位置と環境…… 4
2．調査に至る経過…… 4
3．遺構と遺物…… 7
4．まとめ…… 15

加賀田神社遺跡

1．位置と環境…… 17
2．調査に至る経過…… 17
3．遺構と遺物…… 17
4．まとめ…… 27

小塩遺跡

1．位置と環境…… 28
2．調査に至る経過…… 28
3．遺構と遺物…… 28
4．まとめ…… 31

挿図目次

第１図　河内長野市遺跡分布図

烏帽子形城

第２図　烏帽子形城トレンチ配置図
第３図　第１～６トレンチ地形図

第４図　第１～３トレンチ実測図
第５図　第１トレンチ出土遺構実測図
第６図　第２トレンチ出土遺物実測図
第７図　第３トレンチ出土遺物実測図
第８図　第４トレンチ実測図
第９図　第４トレンチ出土遺物実測図
第10図　第５・６トレンチ土層図
第11図　第５トレンチ出土遺物実測図
第12図　第６トレンチ出土遺物実測図
第13図　第７～９トレンチ地形図
第14図　第７～９トレンチ土層図
第15図　第７トレンチ出土遺物実測図

加賀田神社遺跡

第16図　加賀田神社遺跡遺構配置図
第17図　建物遺構実測図
第18図　土壙１遺構実測図
第19図　土壙２遺構実測図
第20図　土壙１出土遺物実測図
第21図　土壙２・４遺構実測図
第22図　土壙３出土遺物実測図
第23図　土壙５遺構実測図
第24図　土壙６遺構実測図
第25図　ピット２出土遺物実測図
第26図　包含層出土遺物実測図（１）
第27図　包含層出土遺物実測図（２）
第28図　包含層出土遺物実測図（３）

小塩遺跡

第29図　小塩遺跡遺構配置図・土層図
第30図　建物１遺構実測図

第31図　溝１・２土層図
第32図　溝１・２出土遺物実測図
第33図　包含層出土遺物実測図

表　目　次

第１表　河内長野市遺跡地名表
第２表　烏帽子形城出土遺物観察表
第３表　加賀田神社遺跡出土遺物観察表
第４表　小塩遺跡出土遺物観察表

図版目次

烏帽子形城

図版１　遺構　遺跡全景、第１・第２トレンチ（南から）
図版２　遺構　第１トレンチ礎石、遺物出土状況、第３トレンチ（東から）
図版３　遺構　第１トレンチ下層ピット、第４トレンチ（北から）
図版４　遺構　第４トレンチ周辺礎石出土状況、第４トレンチ内礎石出土状況
図版５　遺構　第６トレンチ（西から）、第７トレンチ（東から）
図版６　遺構　第９トレンチ（北から）、第８トレンチ（南から）
図版７　遺物　第１トレンチ（１）、第２トレンチ（８）第３トレンチ（11～15）、第５トレンチ（19、20）、第６トレンチ（23）、第７トレンチ（25）
図版８　遺物　第１トレンチ（２～７）
図版９　遺物　第２トレンチ（９、10）、第４トレンチ（16、17）、第６トレンチ（24）

加賀田神社遺跡

図版10　遺構　遺跡全景、建物（北から）
図版11　遺構　土壙１、２（南から）、土壙１遺物出土状況
図版12　遺構　土壙２、土壙３（東から）
図版13　遺構　土壙４、土壙５（西から）
図版14　遺構　土壙６
図版15　遺物　土壙１（26、27）、Ｐ２（32）、包含層（34～43、45）
図版16　遺物　包含層
図版17　遺物　包含層（55、56、58、61、62）
図版18　遺構　調査区全景（南から）、調査区全景（北から）
図版19　遺構　建物（東から）、溝群（東から）
図版20　遺物　溝１、２（63～66）、包含層（68～74、76、77）

1，はじめに

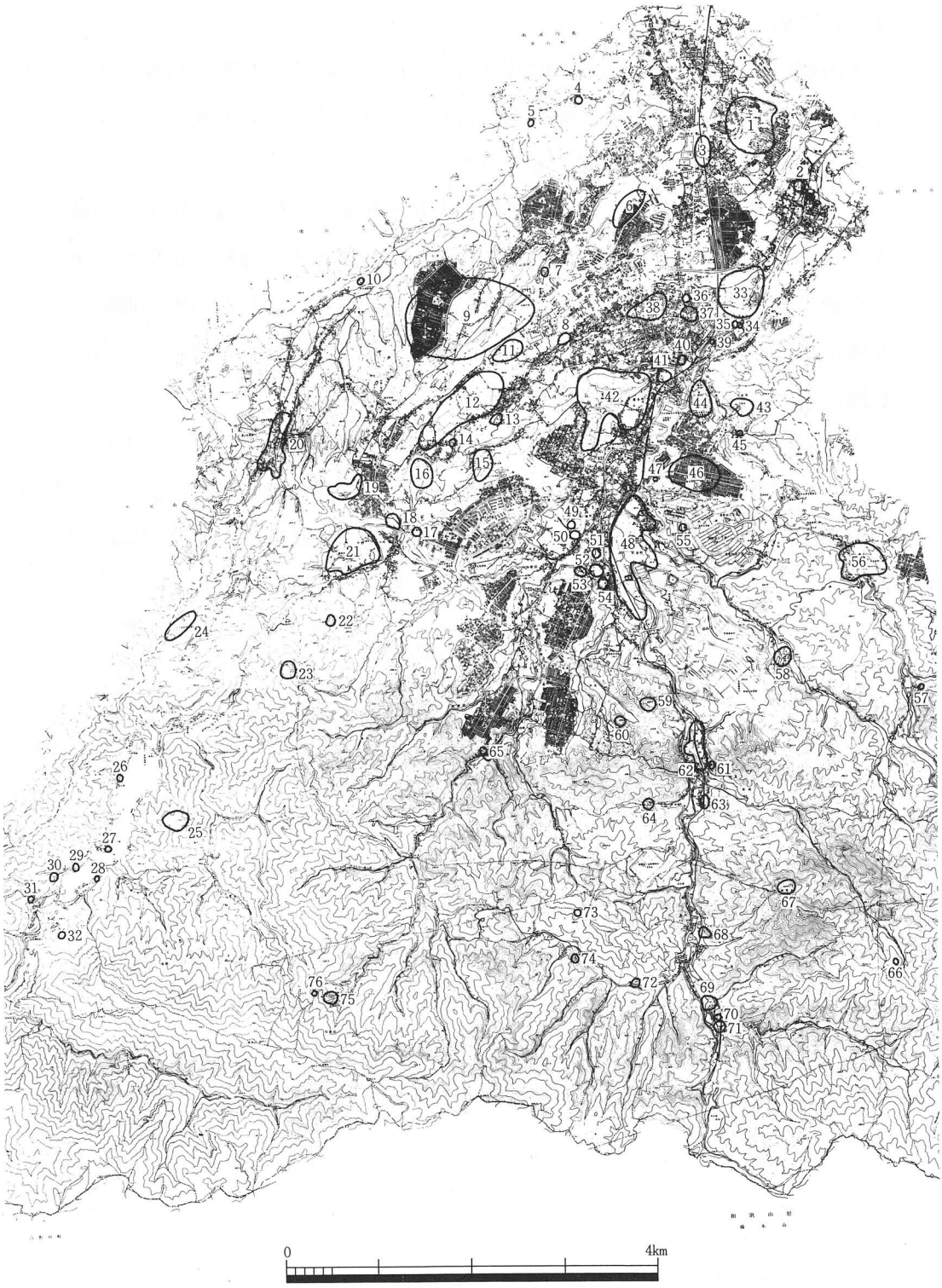
大阪府の東南端に位置する河内長野市は、南に位置する金剛・葛城山系から派生する山地性丘陵と山系に源を発する石川の支流によって形成された挾小な河谷と河岸段丘によって形成されている。

市域は旧河内国錦部郡に属し、紀伊・大和・和泉の三国と境を接する地域である。このため、石川の各支流の谷は各国に通じる街道が通り、古代から重要な交通の要所となり、数多くの文化財が残されている。また、市内の遺跡は、丘陵尾根部に位置する古墳の一部及び中世の城塞を除き、各谷筋を望む山地性丘陵の斜面及び河岸段丘上に分布する。（第１図）

この河内長野市は、位置的には大阪市内から電車で30分という立地条件から早くから宅地開発が進められ近郊住宅都市として発達してきた町である。初期の開発は丘陵尾根部の開発が主であったが、近年は丘陵斜面および河岸段丘に開発が進み、開発件数が増加してきている。更に、住宅開発に伴う人口増加により、住宅都市としての道路アクセス・公共上下水道、さらには区画整理・住宅街区整備・公園整備など都市整備の充実が進められている。

このような状況下では埋蔵文化財への影響は避けて通ることができない状況である。このため、市教育委員会は公共事業については、計画段階での埋蔵文化財の保存協議を進め、さらには事前の試掘調査を実施し、埋蔵文化財の把握に努めている。また、民間開発事業に関しては周知の遺跡以外でも500㎡以上の開発には試掘調査の協力を求め、実施している。

また、市教育委員会は、増加する発掘調査件数に対応するため、昭和63年11月１日に三日市遺跡発掘のため設立された三日市遺跡調査会を解散した後、新たに河内長野市遺跡調査会を設立した。当調査会は、公共事業および個人住宅に関する以外の民間開発に伴う発掘調査を実施するものである。



第１図　河内長野市遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	塩谷遺跡	弥生時代～中世	40	長野神社遺跡	中世
2	千代田神社遺跡	中世	41	大日寺遺跡	
3	菱子尻遺跡	弥生時代～中世	42	烏帽子形古墳	古墳時代
4	小山田1号古墓	奈良時代		烏帽子形城跡	中世
5	小山田2号古墓	奈良時代		烏帽子形八幡宮	中世
6	寺が池遺跡	旧石器時代～縄文時代	43	河合寺	中世
7	住吉元宮遺跡	中世	44	河合寺城跡	中世
8	上原北遺跡			末広窯跡	中世
9	長池窯跡群	中世	45	福田家	近世
10	青垣神社遺跡	中世	46	大師山遺跡	古墳時代前期～弥生時代中期
11	塚穴古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	47	大師山南古墳	古墳時代
12	高向遺跡・高向南遺跡	弥生時代～中世	48	三日市遺跡・石仏遺跡	旧石器時代～近世
13	惣持寺跡	中世	49	小塩遺跡	
14	高向神社遺跡	中世	50	加塩遺跡	
15	宮山古墳	古墳時代後期	51	尾崎遺跡北	
16	高木遺跡	旧石器時代～縄文時代	52	尾崎遺跡南	
17	峰山城跡	中世	53	加賀田神社遺跡	
18	日の谷城跡	中世	54	ジョウノマエ遺跡	
19	仁王山城跡	中世	55	栗山遺跡	
20	金剛寺		56	観心寺	平安時代～
21	日野観音寺遺跡	中世	57	川上神社遺跡	中世
22	稲荷山城跡	中世	58	延命寺	
23	旗蔵城跡	中世	59	石仏城跡	中世
24	国見城跡	中世	60	左近城跡	中世
25	権現城跡	中世	61	薬師寺	
26	清水阿弥陀堂跡	近世	62	清水遺跡	中世
27	滝畑埋墓	近世	63	千早口駅南遺跡	中世
28	中村阿弥陀堂跡	近世	64	地蔵寺	
29	堂村地蔵堂跡	近世	65	大江家	
30	天神社遺跡	中世	66	葛城第18経塚	
31	西の村阿弥陀堂跡	近世	67	旗尾城跡	中世
32	東の村観音堂跡	近世	68	天見駅北方遺跡	中世
33	向野遺跡		69	蟹井淵北遺跡	中世
34	双子塚古墳伝承地		70	蟹井淵神社遺跡	中世
35	五の木古墳跡	古墳時代後期	71	蟹井淵南遺跡	中世
36	古野町墳跡	中世	72	流谷八幡神社遺跡	中世
37	膳所藩陣屋跡	近世	73	葛城第17経塚	
38	西代神社遺跡		74	薬師堂跡	
	本多藩陣屋跡	近世	75	岩湧寺	
39	法師塚古墳伝承地		76	葛城第15経塚	

第1表　河内長野市遺跡地名表

第２図　トレンチ配置図

烏帽子形城

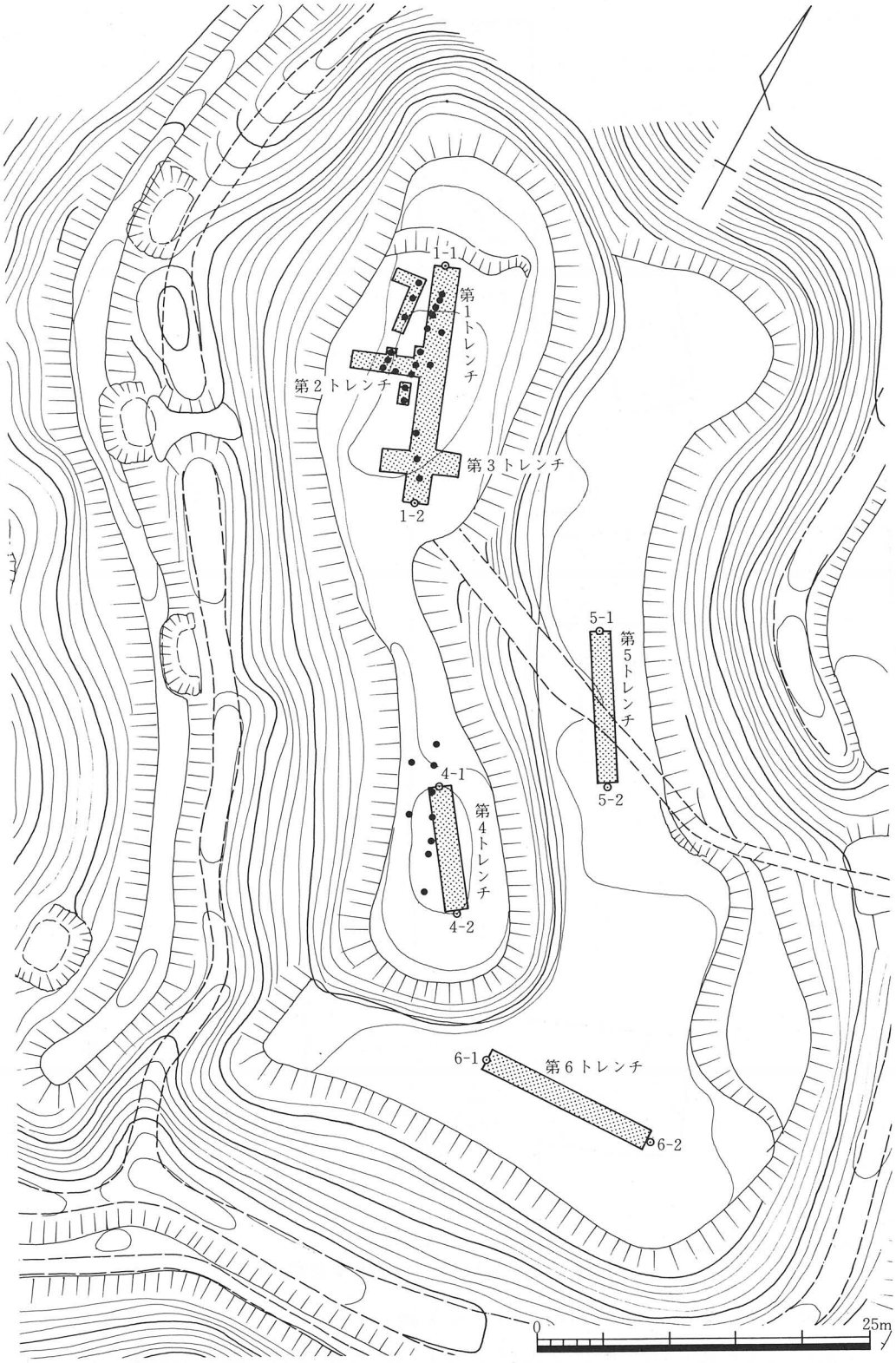
１，位置と環境

当該遺跡は河内長野市喜多町・上田町に所在する遺跡である。

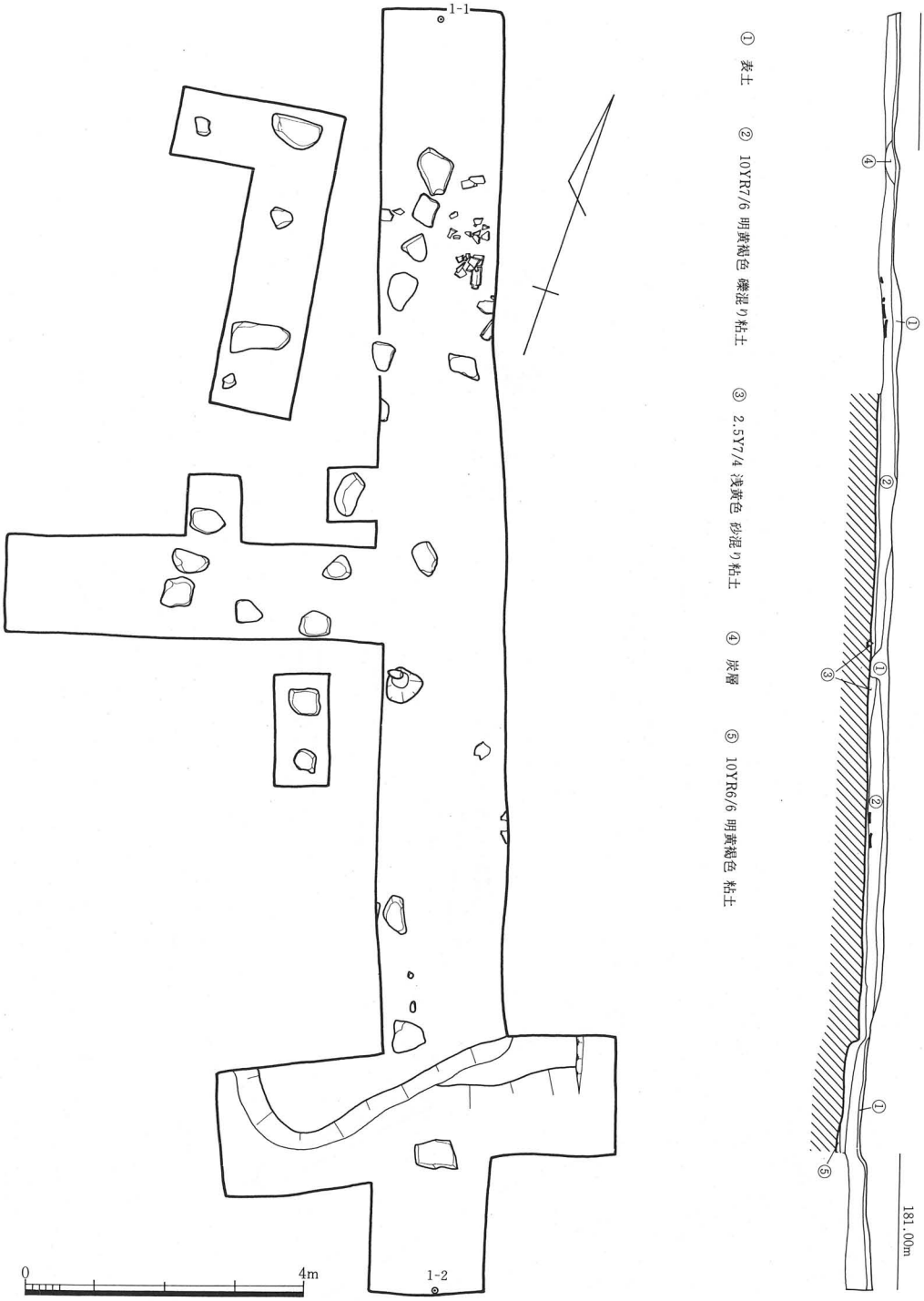
遺跡は金剛・葛城山系から北に派生する烏帽子形山の山頂部に位置し、石川と天見川を望む、標高182mの山頂上の５㌶に城郭施設が分布すると考えられる。当城の東側には烏帽子形八幡神社が位置し、現存の社殿が文明12（1480）年に建立されている。また、境内には神宮寺であった高福寺跡もある。城山の東側の裾部には高野街道が南北に走り、西側の石川を挟んで和泉街道が走る交通の要所である。さらに、城の主郭から北東にのびる尾根端には横穴式石室と考えられる円墳の烏帽子形古墳が位置している。

２，調査に至る経過

当城の所在する烏帽子形山一帯の公園整備を市都市整備部が計画し、担当課と保存協議を実施した。その結果、昭和61年度に北側の駐車場予定地について試掘調査を実施し、谷状地形が確認され若干の遺物の出土を見た。また、城の施



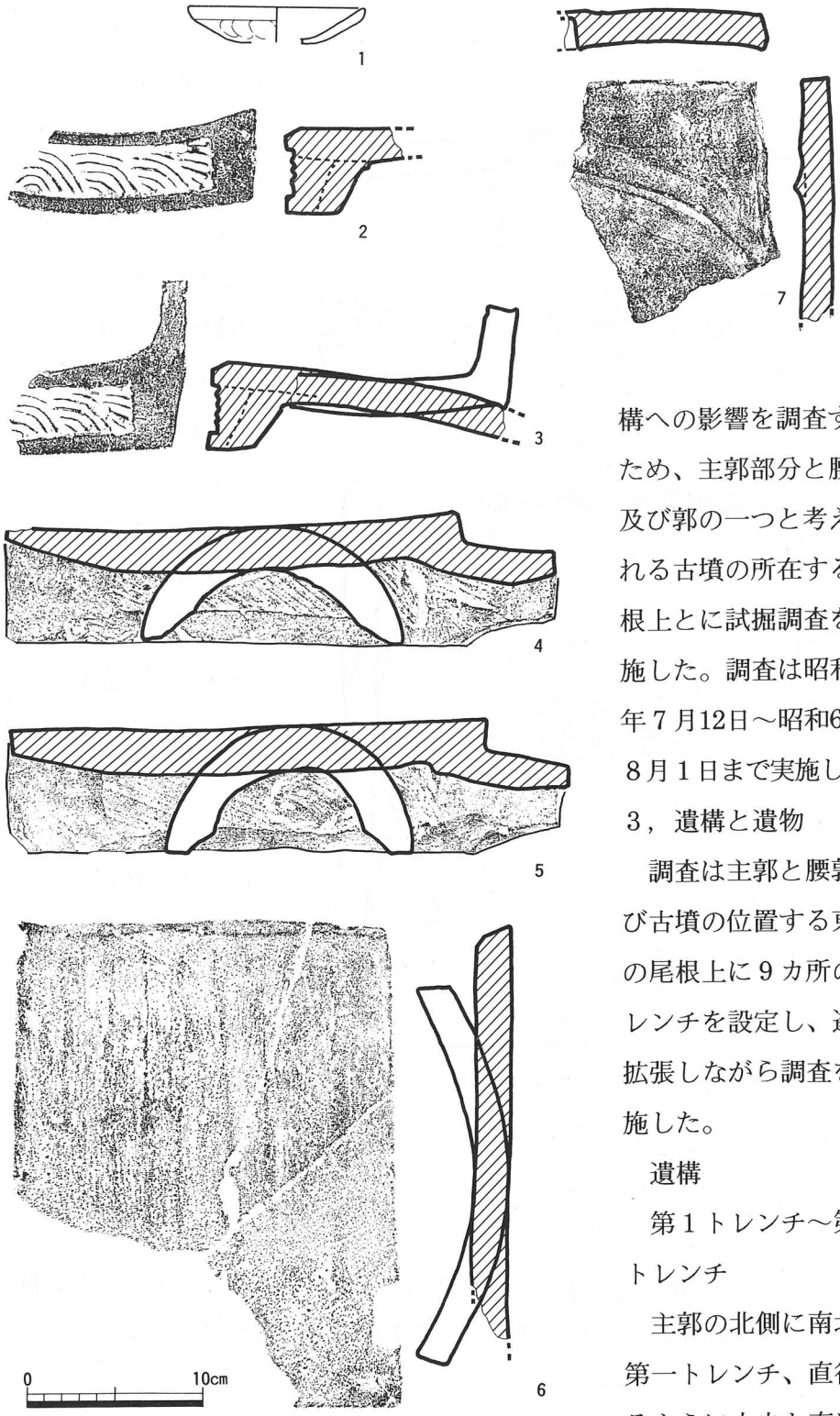
第3図　第1～6トレンチ地形図



第4図　第1～3トレンチ遺構実測図

設が分布する山頂部の測量調査も併せて実施した。

さらに、本年度については、散策道およびベンチ等の小施設の設置に伴う遺



第５図　第１トレンチ出土遺物実測図

構への影響を調査するため、主郭部分と腰郭及び郭の一つと考えられる古墳の所在する尾根上とに試掘調査を実施した。調査は昭和63年７月12日～昭和63年８月１日まで実施した。

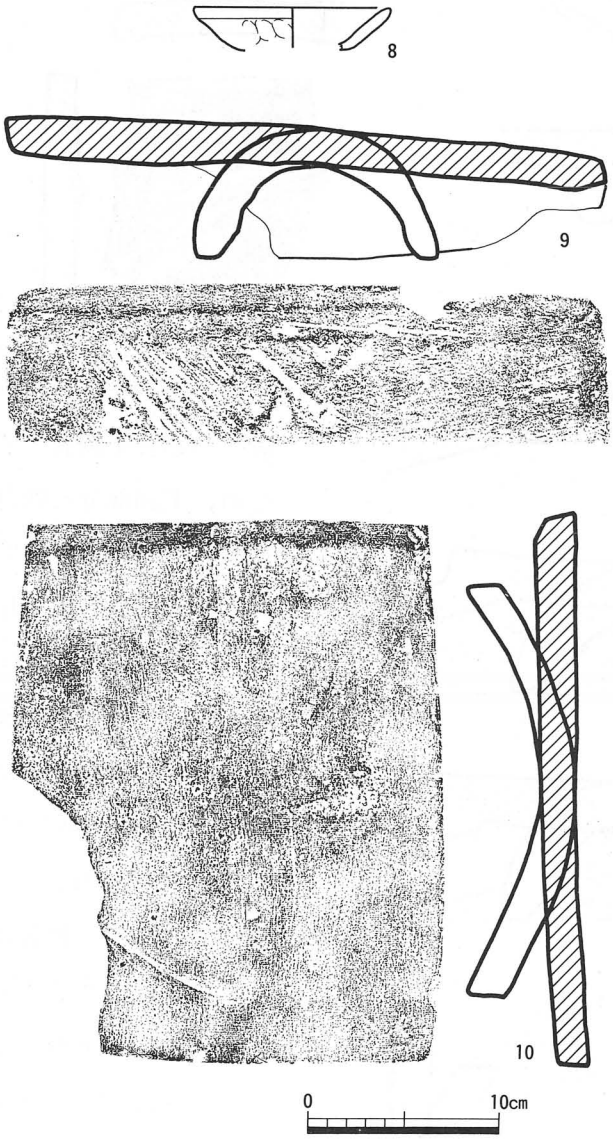
３，遺構と遺物

調査は主郭と腰郭及び古墳の位置する東側の尾根上に９カ所のトレンチを設定し、遂次拡張しながら調査を実施した。

遺構

第１トレンチ～第３トレンチ

主郭の北側に南北に第一トレンチ、直行するように中央と南に第



第６図　第２トレンチ出土遺物実測図

２・３トレンチを設定した。

この調査区では、１層目の表土を除去すると、２層目は明黄褐色の礫混じり粘土となり、それを除去すると地山となる。

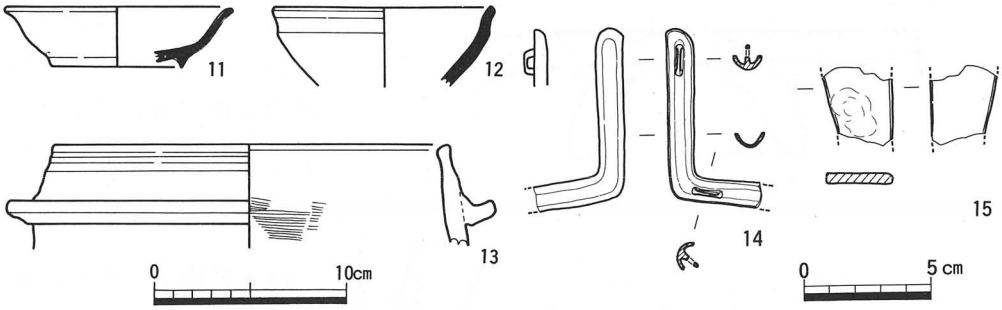
遺構面は、３層上面と地山面の２層が確認された。３層上面からは礎石建物が、地山面からは一部しか確認できなかったが柱穴および落ち込みが検出された。

〈建物１〉　３層上面から検出された平面形が長方形の礎石建物である。桁行７間？（７ｍ）×梁行２間？（２ｍ）、主軸方向はＮ－Ｏを示す。礎石は最大40㎝×80㎝の自然石を利用している。

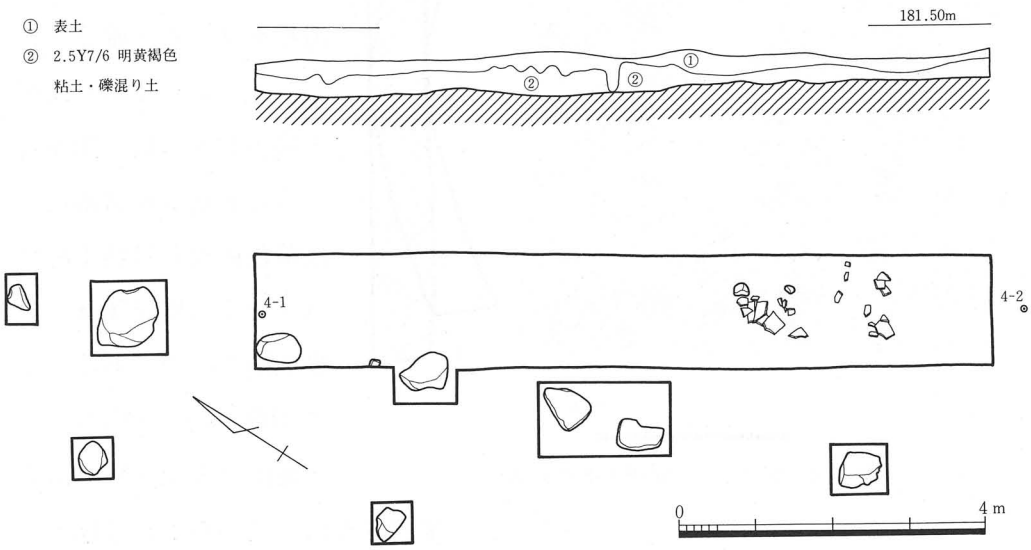
〈落ち込み〉　地山面で調査区の南側で地山が南と西側に落ち込んでゆき、南西端のコーナーが確認された。これは人工的な削平と考えられ、この調査区の部分が地山の削平によって画されているものと考えられる。

〈柱穴〉　地山面まで検出したのは第１トレンチの南側だけであるが、落ち込みと共に１箇所確認された。埋土には若干の焼土と炭が混じっていた。長径60㎝、短径40㎝、深さ40㎝。

第４トレンチ



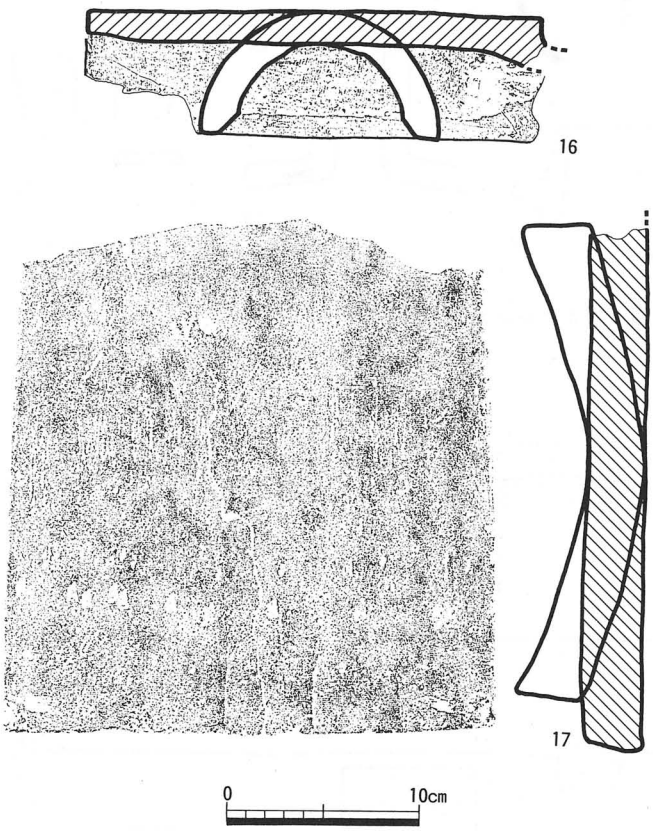
第７図　第３トレンチ出土遺物実測図



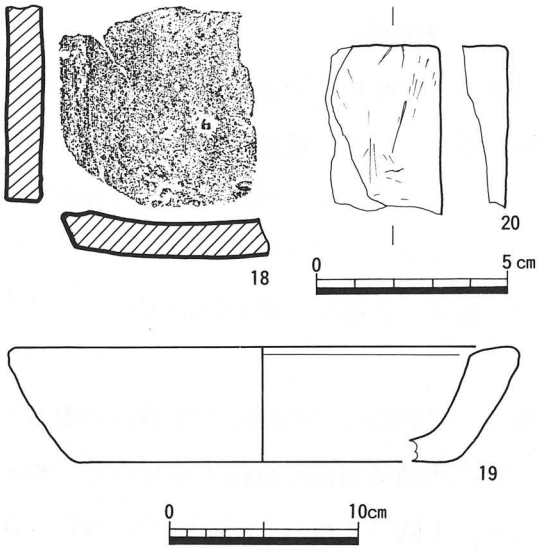
第８図　第４トレンチ実測図

このトレンチは北側と異なり３層が無く、層厚40㎝の表土を除去すると明黄褐色の礫混じり粘土となり、その下層は地山となる。遺構は当初礎石らしい自然石と瓦が検出されただけであった。しかし、トレンチの西側に礎石の建物があるのか、礎石の予想される位置をボーリングステッキで確認したところ、反応があり、その部分について掘下げた。結果、大部分の礎石は消失していたが建物１棟が復元可能であった。

〈建物２〉　平面形長方形の礎石建物で、東側桁行の南側から２番目の礎石と西側の大部分の礎石は消失していた。特に西側は斜面に近接するためその殆どを消失していた。桁行４間（10m）×梁行１間（２m）、主軸方向N－17°－Wを計った。



第９図　第４トレンチ出土遺物実測図



第11図　第５トレンチ出土遺物実測図

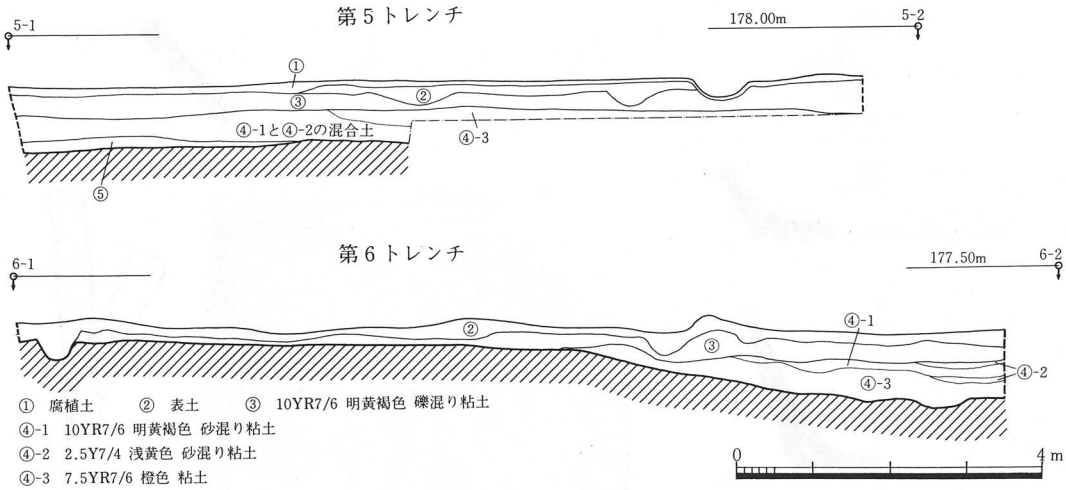
第５・６トレンチ

この両トレンチは、腰郭の南側と現在の主郭の上り口とに設定した。

第５トレンチは、南北に道を横断するように調査を実施した。調査の結果、表土を除き、３層の遺物を伴う層が確認された。表土の下１層目は明黄褐色粘土（層厚30㎝）、さらに２層は明黄褐色と浅黄色砂混じり粘土のブロック土（層厚30㎝）で整地層のようである。３層は橙色粘土（層厚15㎝）で地山は表土下0.98ｍで確認された。地山直上には焼土と炭が見られる。

遺物は１層から土師質土器（19）、砥石（20）、第３層から瓦（18）が出土している。

第６トレンチは腰郭の南側に東西に設定し調査した。調査の結果、地山は、トレンチ東端から7.5ｍ付近（ＴＰ＋176.5ｍ）から下がり始め、10ｍから西端までＴＰ＋175.8ｍの高さでフラットになる。このレベルは第５トレンチの地山



第10図　第５、６トレンチ土層図

面とほぼ同じ高さである。このことから腰郭の南東側は高さ0.6m程度掘り残されていることが予想される。

このため、層序は第５トレンチと対応し、表土下１層目は明黄褐色粘土のブロック土が堆積している。ただし、このトレンチでは３層目に担当する層は確認されなかった。

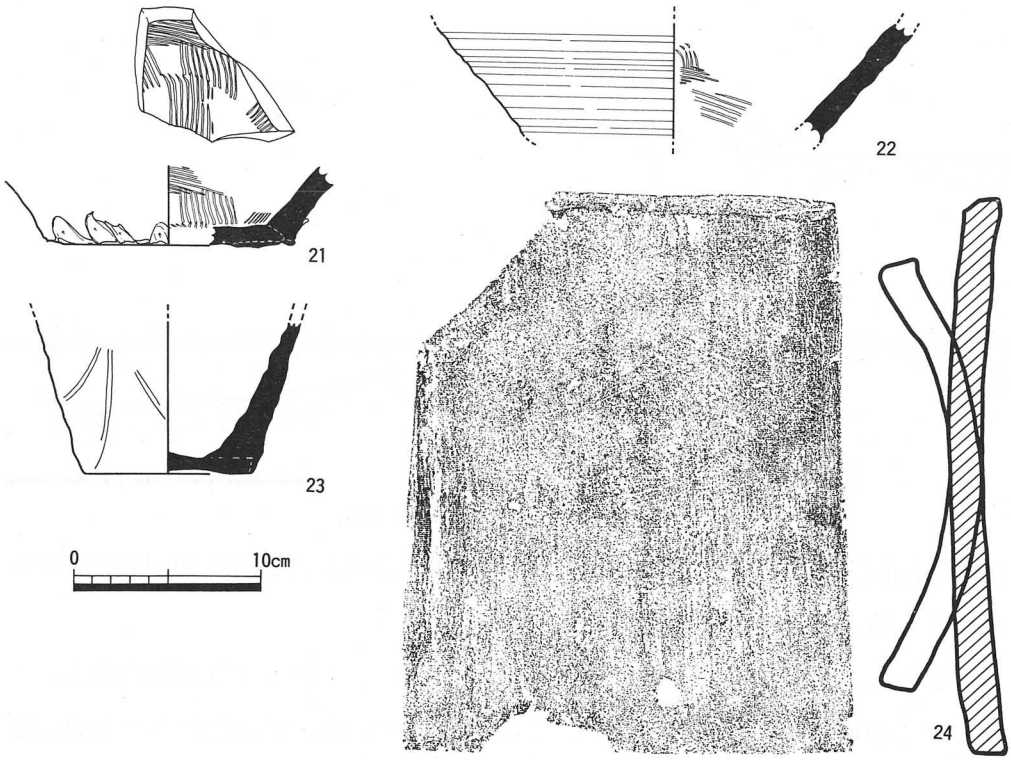
第７～９トレンチ

主郭から250m北東に伸びる烏帽子形古墳の位置する尾根に設定した。この尾根もフラットなため、郭の一部と予想した。トレンチは古墳の東側に設定し、第７と９トレンチは古墳の裾まで調査した。

第７トレンチは５㎝程度ま表土、層厚20㎝の明黄褐色粘土、地山となる。ただ、古墳裾部から0.7mまでは明黄褐色粘土の下層に層厚10㎝のブロック土があり、墳丘の一部と考えられる。また、７－２側1.5mには明黄褐色粘土の下層が黄橙色粘土が挟在する。地山面には土壙状の落ち込みやピットが検出されたが、遺物は石鏃（25）が１点出土しているのみである。

第８トレンチは第７トレンチと同様で、層序も大差ない。表土下0.4mで地山となる。遺物の出土もなく、詳細は不明である。

第９トレンチは層序が表土、明黄褐色粘土、黄橙色粘土、地山となり、地山は表土下0.6mである。墳丘裾部側には墳丘盛土の一部が確認されている。



第12図　第６トレンチ出土遺物実測図

遺物

遺物は９割が瓦で、他に少量の土師質土器、瓦器、陶磁器、金属製品等が出土している。

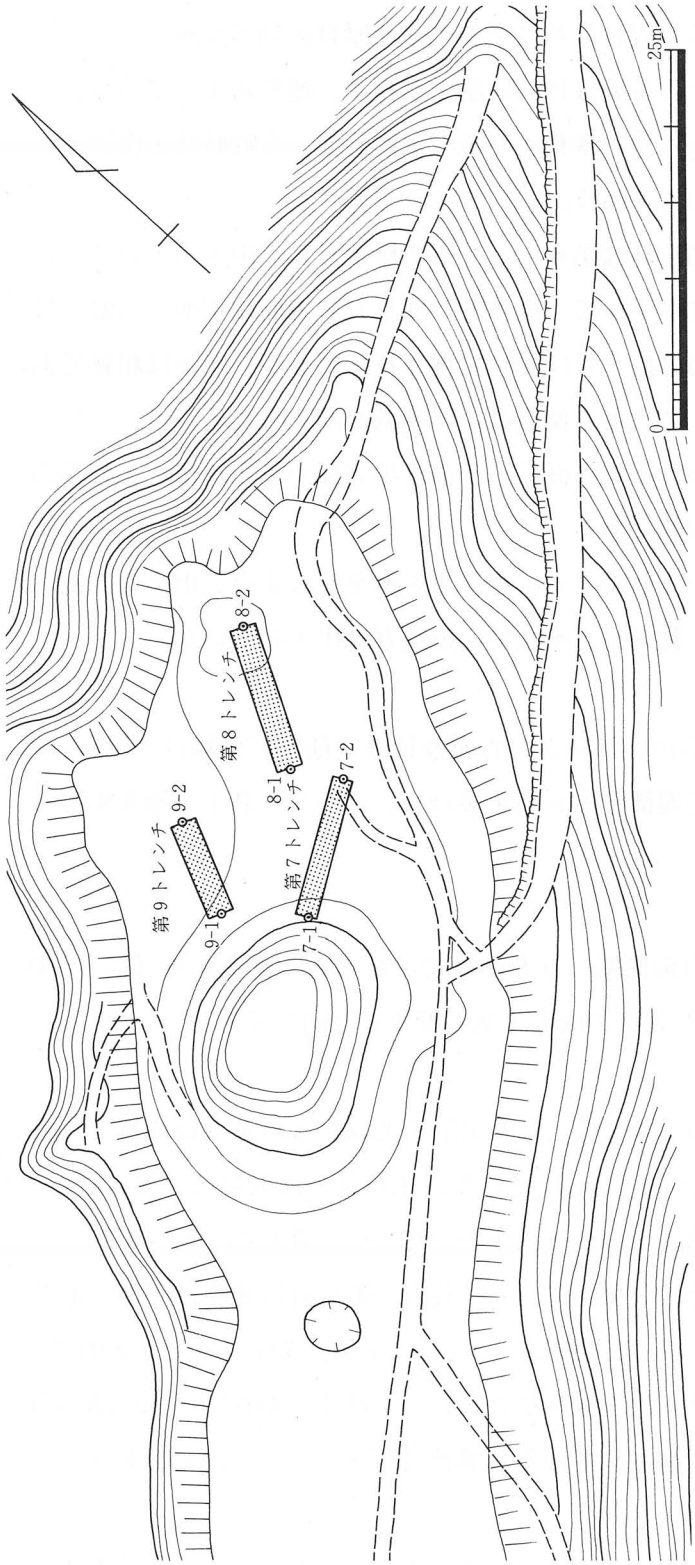
〈土師質土器〉　小皿は口径10.0㎝前後、深型で、口縁部が肥厚し、底部の指圧痕が顕著な形態のものである。第２トレンチ出土の（８）は口縁部に煤が付着している。今回出土している小皿はほとんどがこのタイプで、口縁部に煤の付着したものが見られた。

第５トレンチから出土している火舎（19）は、口径24.7㎝で、上外方へ肥厚しながら広がる体部をもつ。底部は平らであるが、脚の有無は不明である。

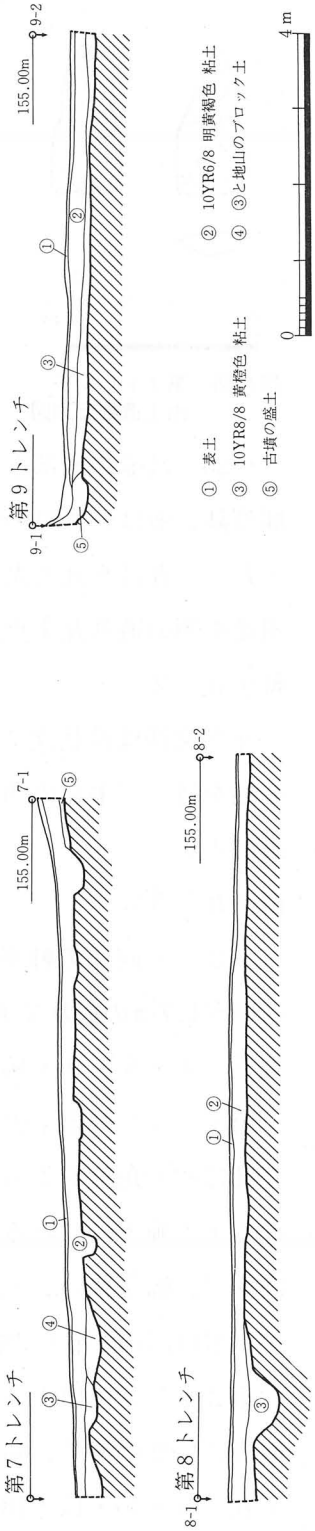
羽釜（13）は、口径20.8㎝で、鍔は短く、外上方へ伸び、口縁部は鋭い段をなして上方へ伸びる。瓦質の羽釜によく見られる形態である。

〈陶磁器〉　第３トレンチから碗、皿が、第６トレンチから鉢、壺が出土している。

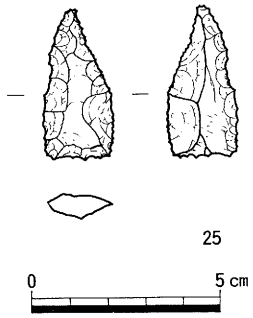
（11）は白磁皿で、口径11.8㎝、器高3.2㎝。断面三角形の小さな高台を有



第13図　第７～９トレンチ地形図



第14図　第７～９トレンチ土層図



第15図　第７トレンチ
出土遺物実測図

する。畳付以外は全面にやや厚目の釉がかかる。

天目茶碗（12）は胎土が粗く、焼き締まっていない。表面に薄い鉄釉がかる。未濃焼で、室町時代末頃の窯のものであろう。

擂り鉢は第６トレンチ２層より２点出土している。いずれも小片で、全体的な擂り目の方向は不明。（21）は内面の擂り目は丹念に施されているが、成形は粗雑である。２点とも使用による摩滅が認められる。

（23）は壺の底部と思われる。外面にヘラ描きの文様が見られる。これらの擂り鉢、壺はいずれも備前焼である。

〈瓦〉　瓦は平瓦と丸瓦がほとんどで、全体でも軒平瓦は２点、掛平瓦１点、用途不明の道具瓦１点で、軒丸瓦、その他の道具瓦は出土していない。

軒平瓦（２）

瓦当文様は波状文であるが、下向きの青海波状の文様で、側縁は2.5㎝とやや幅を持つ。平瓦の凸面先端部分に瓦当を接合し、瓦当裏に粘土を補強する方法による。

掛平瓦（３）

（２）と同様の軒平瓦の両側端に袖を貼り付けたものである。袖は高さ5.0㎝厚さ1.7㎝の板状である。瓦当の成形方法も軒平瓦と同じである。

丸瓦（４・５・９・16）

第１トレンチ出土の２点（４・５）は全長31～32㎝、玉縁長５㎝前後で、丸瓦部にやや角度をもって取り付けられている。木口部の面取りは瓦厚さの2/3近くまで施されている。第４トレンチ出土の（16）は、丸瓦部の長さが短く、肉薄で、幅も狭い。玉縁部は欠失しており、長さ、取り付け角度は不明であるが、木口部の面取りの幅から、玉縁長は（４，５）に比べ短いものと思われる。

第２トレンチ出土の（９）は玉縁を持たないいわゆる行基瓦で、木口部の面取りは角度が無く、幅広く施されている。調整は（４・５）と同じである。

平瓦（６・10・17・18・24）

全長29㎝、狭幅21㎝、広幅23㎝前後で、厚さ1.7㎝～２㎝のものが最も多い

が、第４トレンチの（17）は広幅26.5㎝、厚さ3.0㎝と大きい。

また技法は、（６・17）が凹面無文の縦長のタタキ、凸面をナデ調整。（10）は凹面布目をナデ消し、凸面縄目をナデ消し。（18・19）は両面をナデ調整する。離れ砂は（18）にのみ見られる。

道具瓦（７）

用途不明の道具瓦片（７）が１点出土しているのみである。片面に、断面三角形の突帯が弧を描いてめぐり、上端から2.9㎝、右端から10.4㎝（横幅のほぼ中央部と思われる）の位置に孔を穿つ。穿孔は貫通しない。

軒平瓦、掛平瓦の瓦当文様の波状文はかなり形骸化したもので、16世紀中頃以降のものと考えられる。その他の瓦もやはり室町時代末から江戸時代初頭のものと考えられる。

〈金属製品〉　第３トレンチから銅製品と鉄製品が出土している。（14）は銅製の飾り金具で、Ｌ字状を呈するが、先端部を欠失しており全形は明らかでない。断面はＵ字形を呈し、凹面の２箇所に固定用の有孔の突起が接合されている。（15）は器種不明の鉄製品で、断面は長方形を呈しており刃物である可能性は薄い。

〈石製品〉　小型の砥石（20）は第５トレンチ上層から出土している。橙色を呈する切り石で、主に縦方向に使用痕が認められる。

第７トレンチから石鏃（25）が１点出土している。平基無茎式で、平面形は縦長の二等辺三角形に近い形を呈する。断面は凸レンズ状である。

４，まとめ

以上の結果をまとめると以下の通りである。

主郭について

今回の調査において２面の遺構面があることが確認された。下層については時期が明確には把握できないが、ピットの存在と主郭北側の南側部分に地山の整形部分が確認された。上層からは２棟の礎石建物が確認された。２棟とも梁行が狭く、また、郭の西側に沿って建てられており、防衛的な施設と考えられる。また、周囲からの瓦の出土はこの建物が瓦葺きの可能性を示している。

腰郭について

腰郭については、2箇所のトレンチの結果から地山面での南側東部分が高さ0.6mで高くなっていることが予想される。堆積層から2ないし3面の遺構面が存在するようである。また、堆積深度が深く、地山面と上層とは地形的にはだいぶ改変されている。

このような状況から、調査された地山面が築城当時の状況を示しているとすれば、廃城時の形状とは主郭と腰郭を見る限り、大きく改変されているようである。

城の改築を文献から見れば、天正12年に豊臣秀吉が根来衆に対して、この城を修復させている。しかし、それまでにも、3回以上城は攻められており、その度に、修復はされているものと考えられる。文献から見る限り、現在の城の縄張りは、秀吉により修復の結果と見るのが妥当であろう。また、礎石建物と供伴する瓦の時期もこの時期と大過ないものと考えられる。

最後に

今回の調査は確認調査程度のものであったが、城の遺構がまだ良好の状態で保存されていることが判明した。この城跡一帯は公園として保存され、破壊される危険はないが、周囲は宅地開発が進み、城周囲の施設は喪失する可能性が高い。今後、計画的な学術調査によって。中世城郭としての烏帽子形城の全貌が明らかになれば、今後の郷土並びに日本中世史の解明に重要な示唆を与えるものであり、早急な学術発掘が望まれるものである。

加賀田神社遺跡

1，位置と環境

調査場所は、葛城山系から北にのびる丘陵の端、天見川と加賀田川の合流付近を見下ろす標高180mの尾根上に位置する。この遺跡の東側段丘上には平安時代と中世の複合遺跡である尾崎遺跡、中世のジョウノマエ遺跡が位置している。また、加賀田川の対岸には古墳時代後期の加塩遺跡、7世紀から8世紀の小塩遺跡がある。さらに、天見川の対岸には旧石器から近世までの複合遺跡の三日市遺跡、中世の石仏遺跡が位置している。

当遺跡の位置する加賀田神社は現在の社殿が元禄16年に建替えられた三間社流造であるが、慶長4年9月の銘がある古絵図によれば境内には奥の坊・北の坊・南の坊・宮の坊・薬師堂などが描かれており、この時期にはこれらの寺院関係の建物が存在したようである。

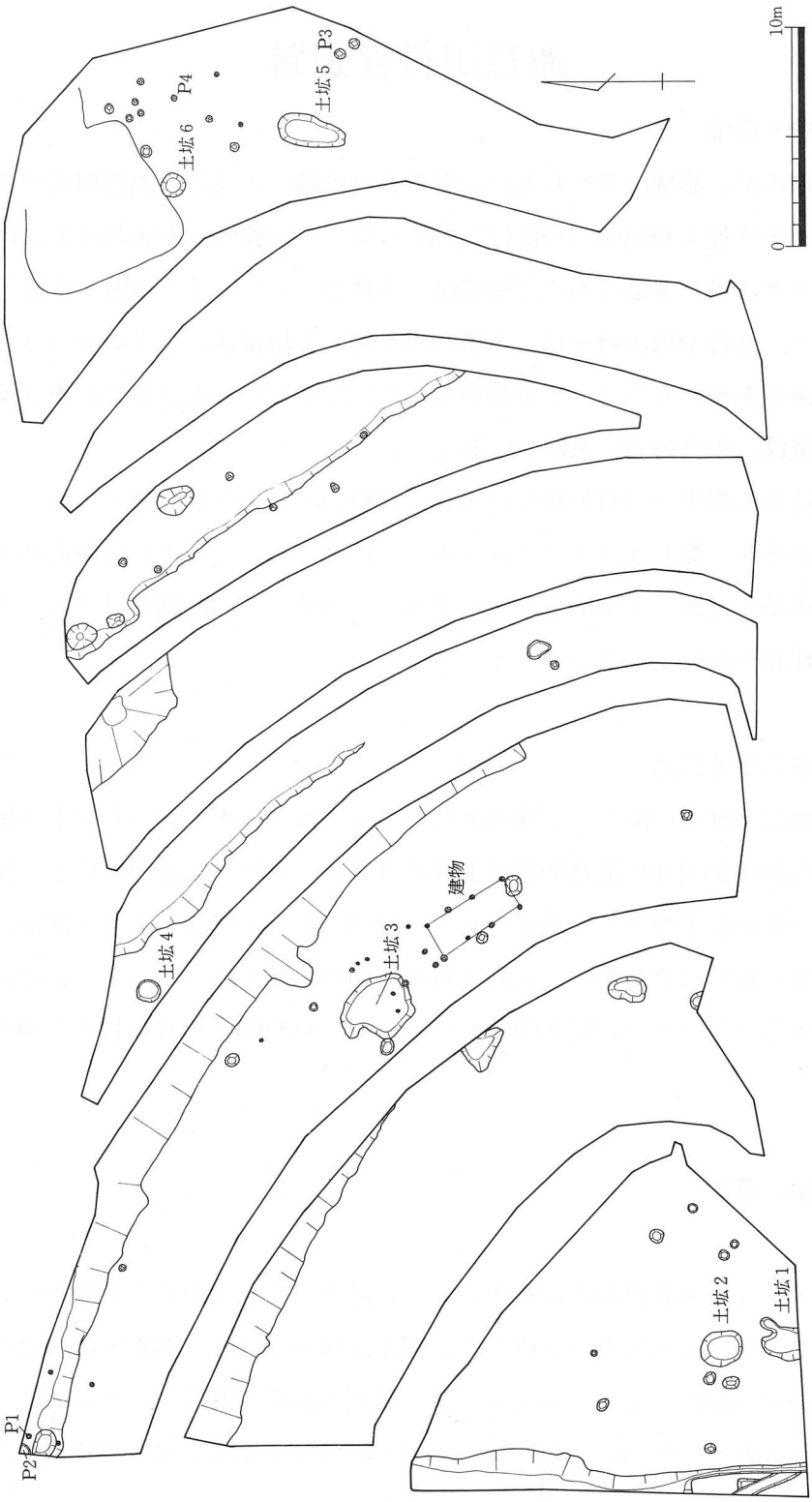
2，調査に至る経過

当該地は、都市公園として開発されることになり、担当課からの事前協議があり、当該地が周知の遺跡加賀田遺跡に含まれ、また、古絵図からも寺院関係の遺構の存在が予想され、保存の必要の旨回答した。協議の結果、都市公園の必要性等行政的な見地から、公園計画の撤回が困難で或ることから、記録保存を実施することになり、昭和63年9月6日から昭和63年10月15日まで調査を実施した。

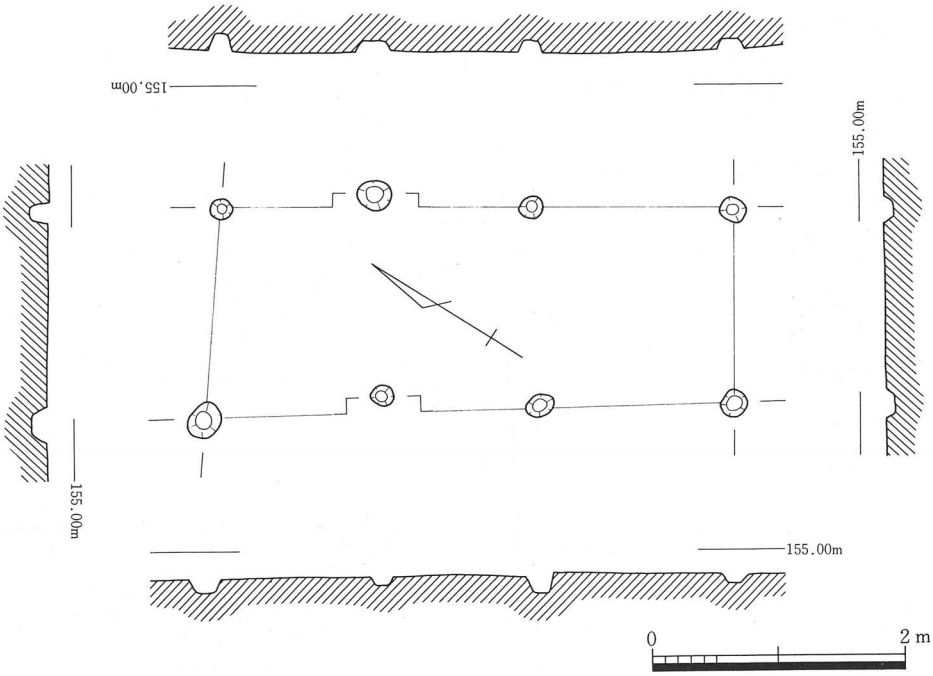
3，遺構と遺物

遺構

調査地区は現加賀田神社の東側斜面で、最近まで8段からなる畑地として利用されていた。最上段と最下段との比高差は9mを計る。調査地は古絵図によれば北の坊が位置するところであった。調査の結果、遺構のほとんどは、この耕作地を造成するために大部分が削平を受けており、確認された遺構は少なかった。



第16図　加賀田神社遺跡遺構配置図



第17図　建物遺構実測図

遺構は建物、土壙が確認された。

〈建物〉　調査区の３段目、土壙３の南側３ｍに位置する。桁行３間（4.2m）×梁行１間（1.6m）、桁行柱間1.4m、主軸方向Ｎ－34°－Ｗの掘立柱建物である。柱穴は径0.2～0.3m、深さ0.15mを計る。今回、検出された唯一の建物である。

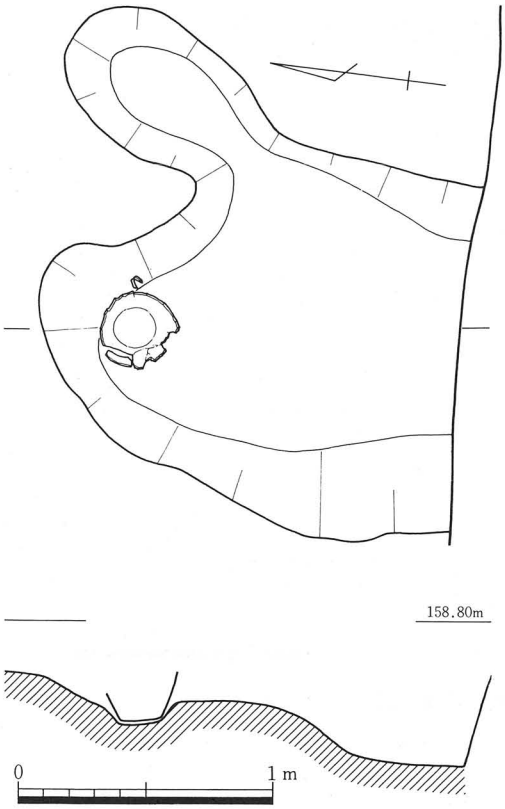
遺物は出土していない。

〈土壙１〉　調査区の１段目、南側に位置する。平面形は不定形で南側は調査区外に伸びる。検出長1.7m、短軸1.5m、深さ0.4m。土壙北側からは埋甕が検出された。埋甕が検出された。埋甕は上半を欠損しているが、甕の幅で掘り方が確認された。出土遺物は埋甕（26）と十能（27）、瓦、陶器片が出土している。

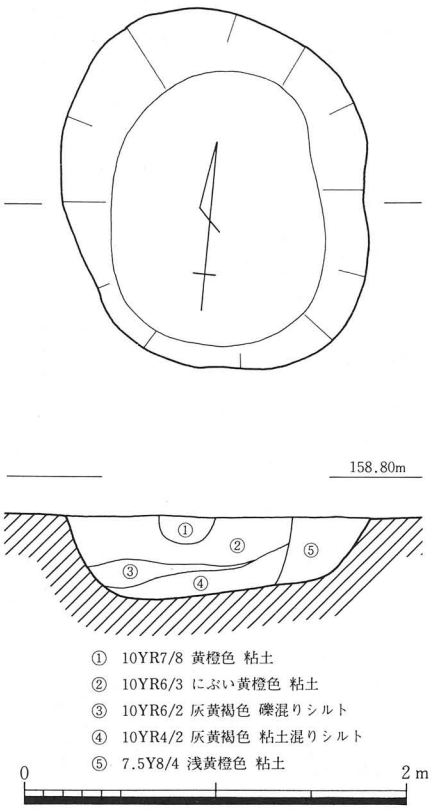
〈土壙２〉　調査区の１段目、土壙２の北側１ｍに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径1.9m、短径1.4m、深さ0.45mを計る。

遺物は出土していない。

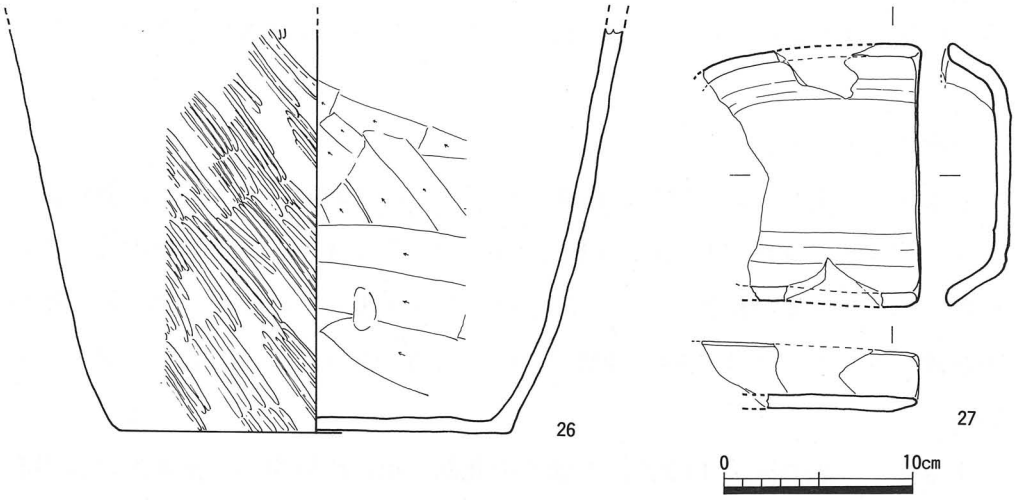
〈土壙３〉　調査区の３段目、建物の南側２ｍに位置する。平面図は不定楕円



第18図　土坑１遺構実測図



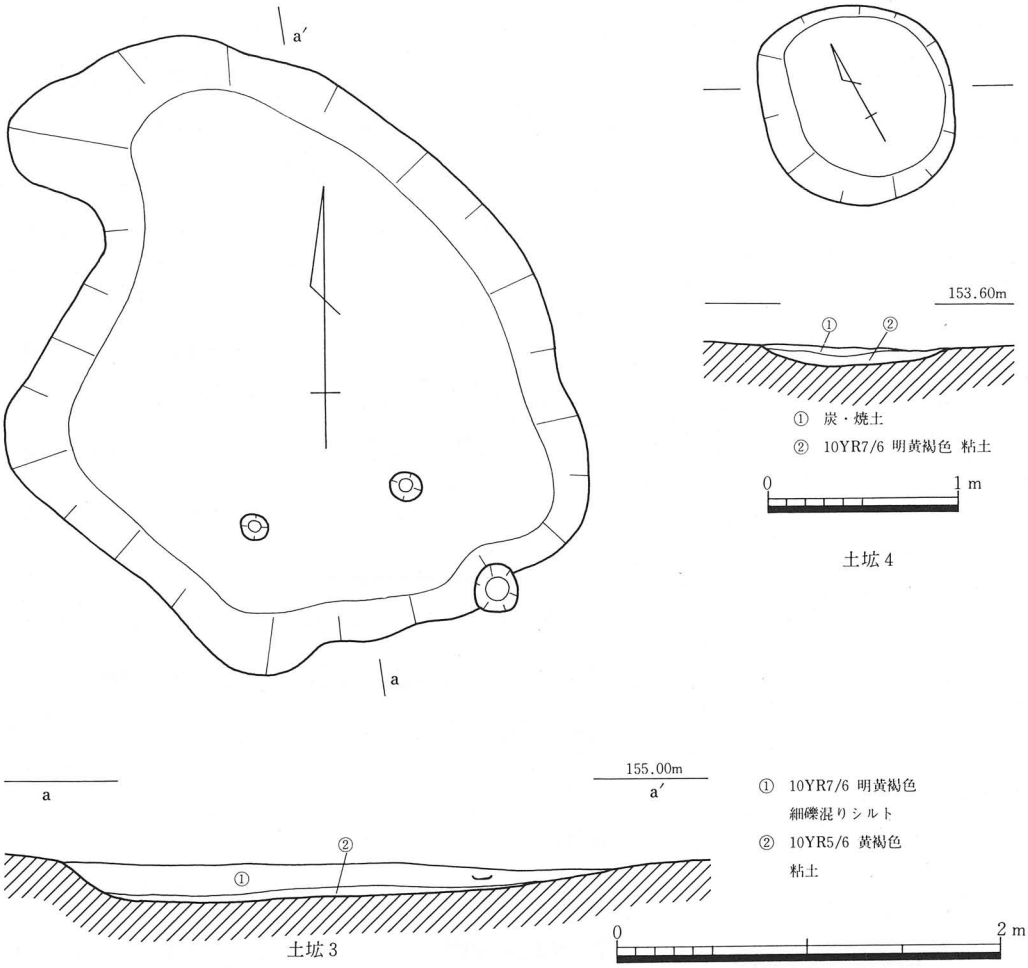
第19図　土坑２遺構実測図



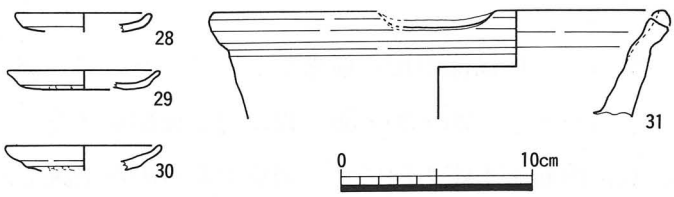
第20図　土坑１出土遺物実測図

形を呈する。長径3.5m、短径2.9m、深さ0.2mを計る。

遺物は土師質小皿（28～30）火舎（31）、瓦、瓦器片が出土している。



第21図　土坑3・4遺構実測図

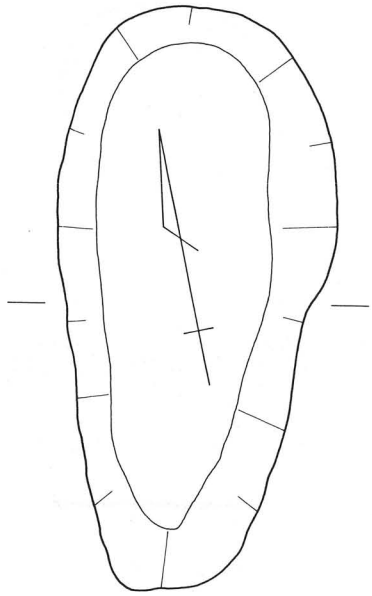


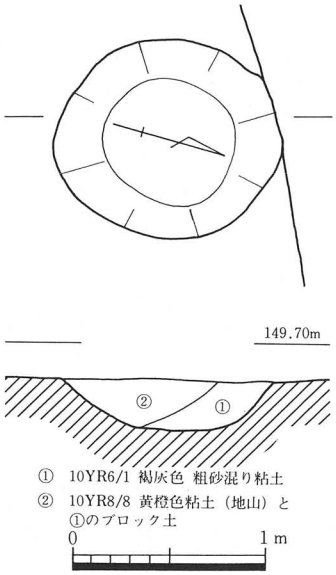
第22図　土坑3出土遺物実測図

〈土壙4〉　調査区の4段目、北端に位置する。平面形は楕円形を呈する。長径1.1m、短径1.0m、深さ0.1mを計る。この土壙は埋土が2層からなり、上層は火を受け焼土と炭層であり、下層は明黄褐色粘土である。

遺物は出土していない。

〈土壙5〉　調査区の8段目、最下段の中央に位置する。平面図は長楕円形を呈する。長径3.1m、短径1.3m、深さ0.4m、主軸方向はN－14°－Eを計る。

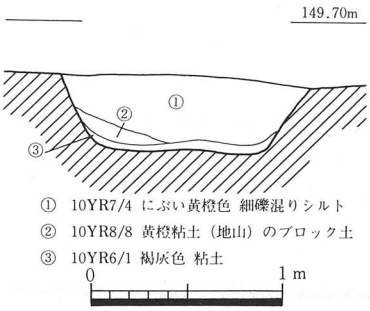




第24図　土坑６遺構実測図

〈土壙６〉　調査区の８段目、土壙５の北側６ｍに位置する。平面形は円形を呈する。径1.1ｍ、深さ0.26ｍを計る。

〈ピット〉　建物以外でも遺物の出土したピット４箇所が確認された。実測可能な遺物はＰ２の瓦器椀（32）のみである。



第23図　土坑５遺構実測図

遺物

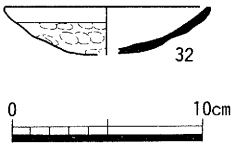
出土遺物のうち遺構に伴うものは少なく、大部分は包含層からの出土である。また、遺物の大半は瓦が占め、土師質の小皿、甕と、少量の瓦器、瓦質の甕、羽釜などが混じる。

〈土師質小皿〉　口径６～８㎝で、口縁部が短く扁平なタイプ（28、34～38）と、口縁部がやや長く外反するタイプ（29・30・39～42）の２種類がある。手法は、口縁部をヨコナデ、底部内面を不定方向にナデ調整するものが主流であるが、（33）のように内面にハケ目調整が施されているものや、（34・35）のように内面にヘラ状工具により圧痕が放射状に残るものもある。圧痕はいずれも半径2.5㎝で（34）は右回り、（33）は右回りに施されている。

〈土師質小椀〉　包含層から出土している（43）は高台のつくりが粗雑で、ハリツケ時の指圧痕もほとんど調整されていない。

〈土師質甕〉　土壙１から１点出土している（26）は湊焼で、底径20.6㎝、型

造りの平底である。境環濠都市遺跡の編年によばれ、17世紀前半のものと考えられる。



第25図　Ｐ２出土遺物実測図

〈土師質火舎、十能〉　火舎（31）は土壙３から出土している。残存部に文様はなく、両面に炭素が付着している。

十能（27）は土壙１から出土している。柄の部分は欠失している。供伴の甕と同じく堺の湊焼であろう。小口部外面の摩耗は使用によるものであると思われる。

〈瓦器椀〉　実測可能なものは、ピット２と包含層から出土している。ピット２の（32）および、包含層の（45・46）は口径10㎝前後、内面は不定方向にナデ調整し、外面は指圧痕が顕著に残るもので、尾上編年Ⅳ－５に相当する。しかし（47、48）は器高２㎝以下の皿に近い器形で、（48）の内面は粗いハケ目調整である。包含層からの出土である為この２点の瓦器が共存するものか、Ⅳ－５以降のものなのかは明らかではない。

〈瓦質土器〉　甕と羽釜が包含層より出土している。甕（49）は口縁部が短く外面に横方向のタタキを施す。

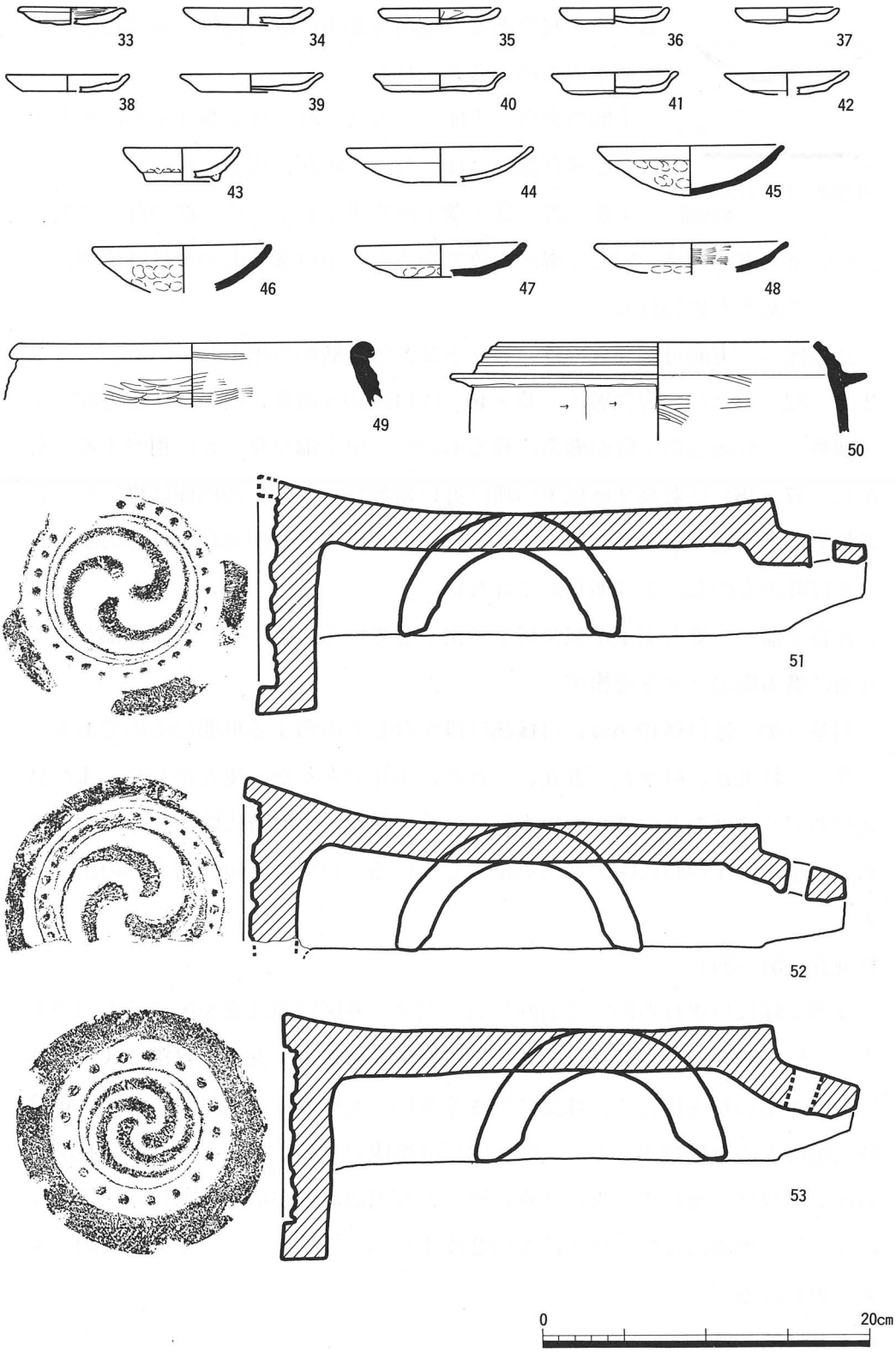
羽釜（50）は口径19.6㎝、口縁部は段をなして内弯する形態のものである。

〈瓦〉　軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦と、小片であるが、鬼瓦があり、また鳥衾瓦若しくは雁振瓦の破片も出土している。鎌倉～室町時代頃のものが中心であり、小片は江戸時代頃のものも出土している。いずれも包含層からの出土である。

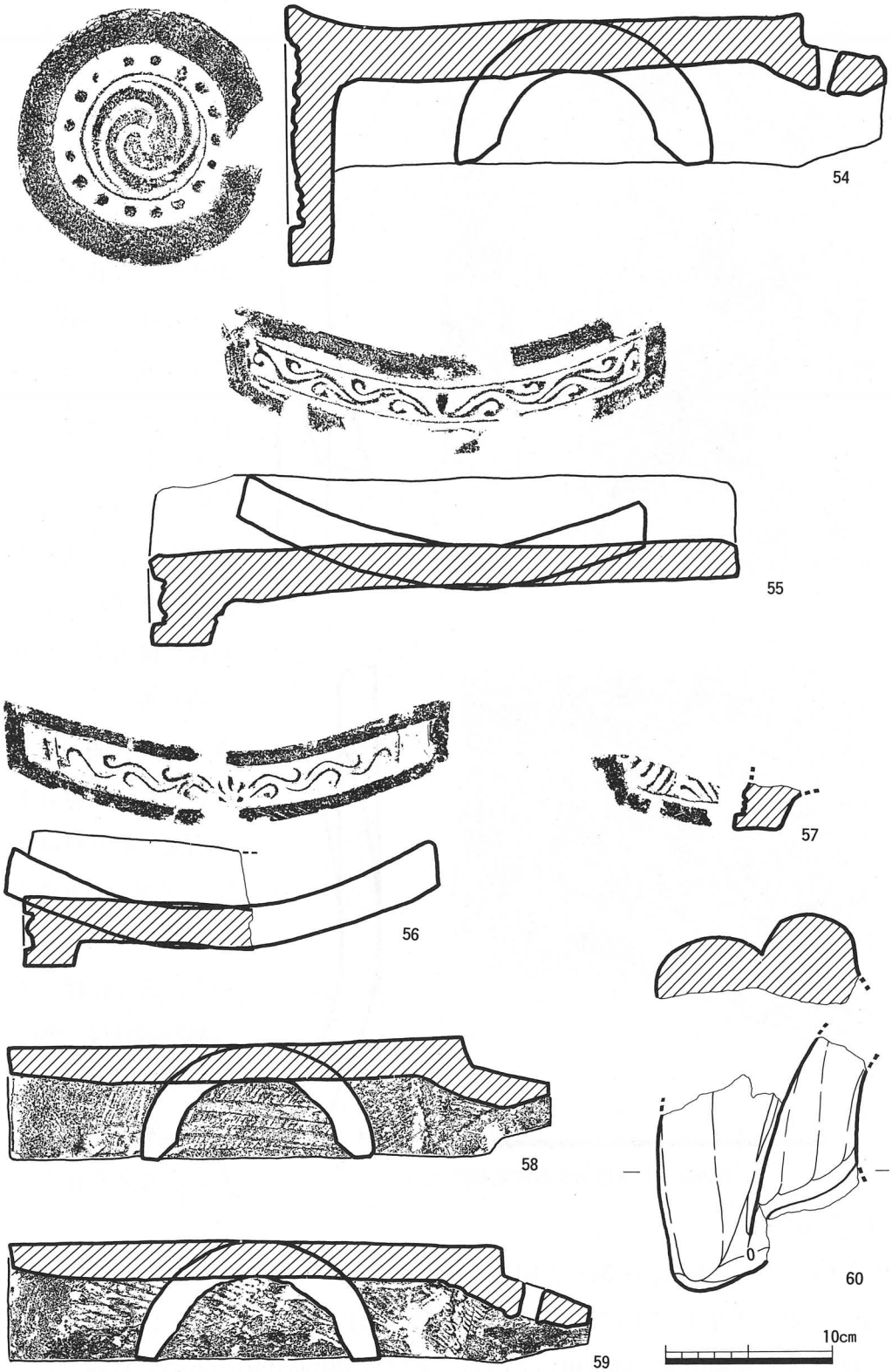
軒丸瓦（51～54）

瓦当文様はいずれも内区に右回りの三巴文、外区に連珠文を配するものである。（51・52）は全長37.5㎝ほどで、玉縁は５㎝以上。瓦当周縁部は狭く、高い。巴の尾の長さは長く、珠文は小さく多い。元興寺の瓦編年によれば、鎌倉時代頃のものと推察される。（53・54）は焼成の甘い黄橙色の瓦で、全長35㎝前後、玉縁は５㎝以内。先の２点に比べ、瓦当周縁部が広く、低い。巴は中央に集まり、圏線はない。珠文は先の２点よりも大きく少ない。室町時代頃のものと思われる。

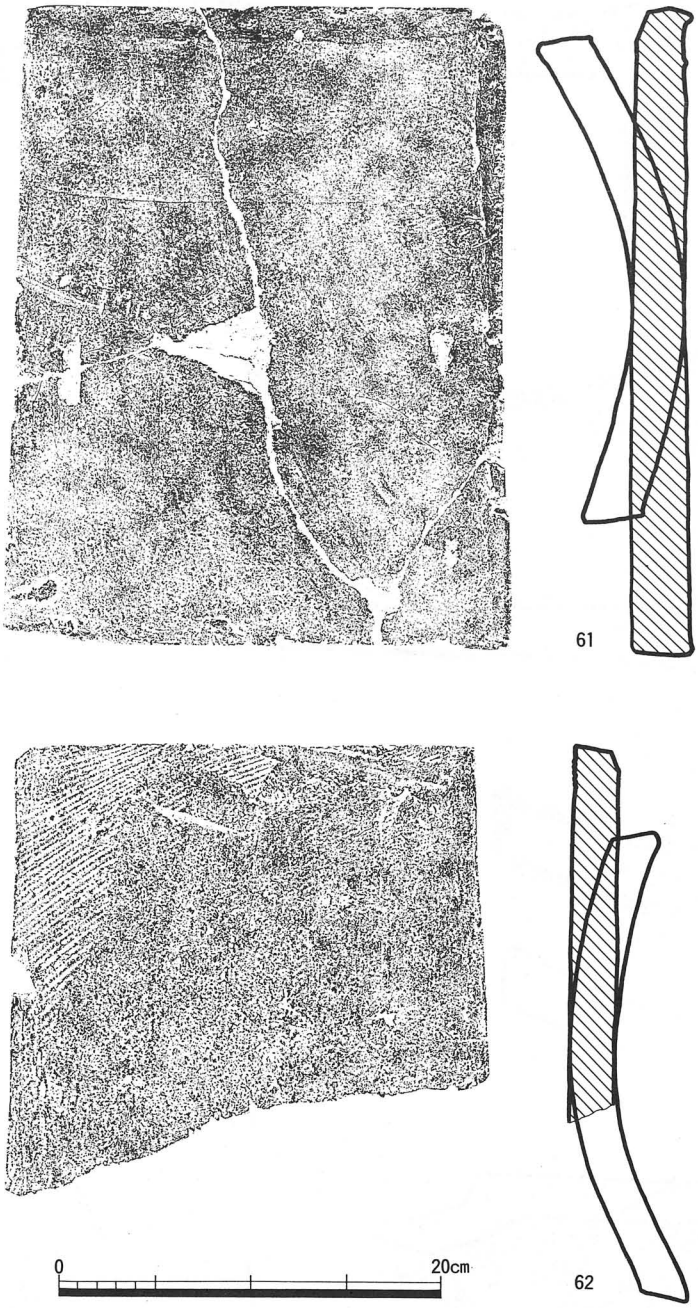
軒平瓦（55～57）



第26図　包含層出土遺物実測図（1）



第27図　包含層出土遺物実測図（２）



第28図　包含層出土遺物実測図（3）

瓦当文様は均整唐草文が主流で、波状文を有する破片が1点（57）見られる。唐草文はいずれも形骸化した文様となっているが、（55）は上下に郭線を有し、唐草文が両側端まで達しており、瓦当厚も厚いことから（56）よりも古いと考えられる。いずれも室町時代以降のものと考えられる。

丸瓦（58・59）

いずれも玉縁長5㎝前後、取り付け角度は（59）の方がやや下向気味になっている。それに伴い木口部の面取りも（59）がやや角度を持つ。ともに室町時代頃のものと考えられる。

平瓦（61・62）

（61）は軒丸瓦（53・54）と同じく黄橙色を呈する瓦で、全長34㎝。厚さ3.1㎝。（62）は丸瓦（58・59）とよく似た胎土の瓦である。（61）は凹面側に、（62）は凸面側に離れ砂を用いている。やはり室町時代頃のものである。

4，まとめ

調査の結果をまとめると以下の通りである。

1．調査区は畑地を造成するために山を削り、前面に盛土を繰り返しており、このため遺構の大部分が削平されたようである。

2．慶長4（1599）年の絵図に見られる寺院の各建物はすでに削平されているが、大量の瓦の出土は建物の存在を確証するものである。

3．出土遺物から13世紀から16世紀には建物が存続し建てられていた可能性を示している。

以上の通り、当初予想していた寺院関係の建物は残存していなかったが、瓦の出土は古絵図の建物の存在を立証した。

小　塩　遺　跡

1，位置と環境

当遺跡は加賀田川を東側に見下ろす、河岸段丘上の標高120mに位置する。微地形としては、北にのびる丘陵の東側斜面で南側には小谷が入り込んでいる。この小谷を挟んで6世紀の竪穴住居や掘立柱建物が検出された加塩遺跡が位置している。また、加賀田川の対岸には古墳時代から中世の複合遺跡である尾崎遺跡や中世のジョウノマエ遺跡が位置する。

2，調査に至る経過

当該地に、ガソリンスタンドが建設されることになり、原因者から市教育委員会に事前協議があり、市教育委員会は当該地が周知の遺跡小塩遺跡に近接するため、遺構の存在が予想され、試掘調査を実施した。結果、遺構・遺物が確認された。このため、保存協議がなされ、タンク埋設部分について記録保存を実施することになり、調査については河内長野市遺跡調査会が実施する事になった。平成元年3月19日に委託契約を締結し、平成元年3月20日から平成元年3月31日まで調査を実施した。

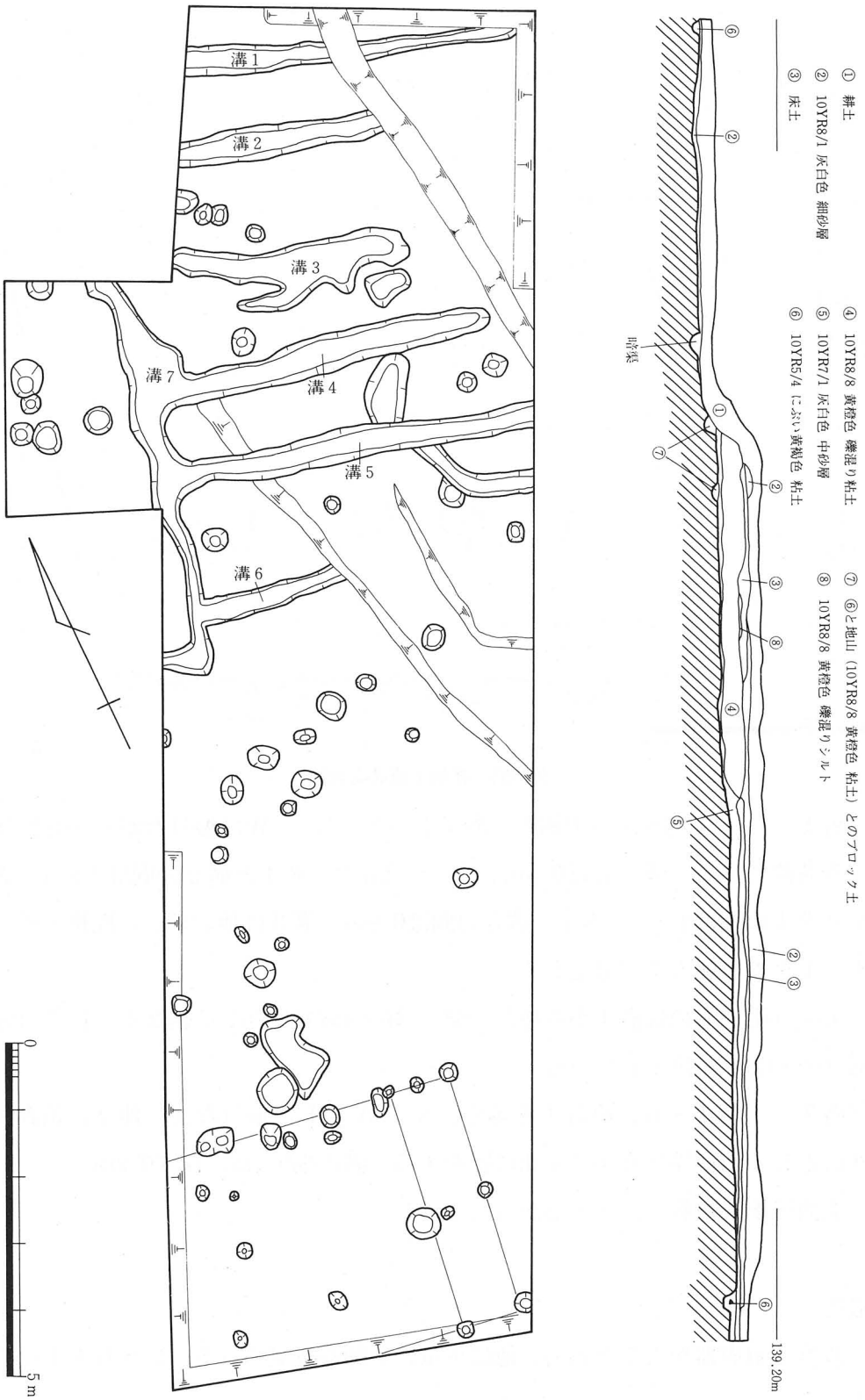
3，遺構と遺物

調査範囲が狭く、遺構の全容は把握できなかったが、掘立柱建物・溝等が確認された。層序は耕土・床土を除去するとにぶい黄褐色粘土が若干あり、すぐ地山となる。地山は現耕土下0.5mである。

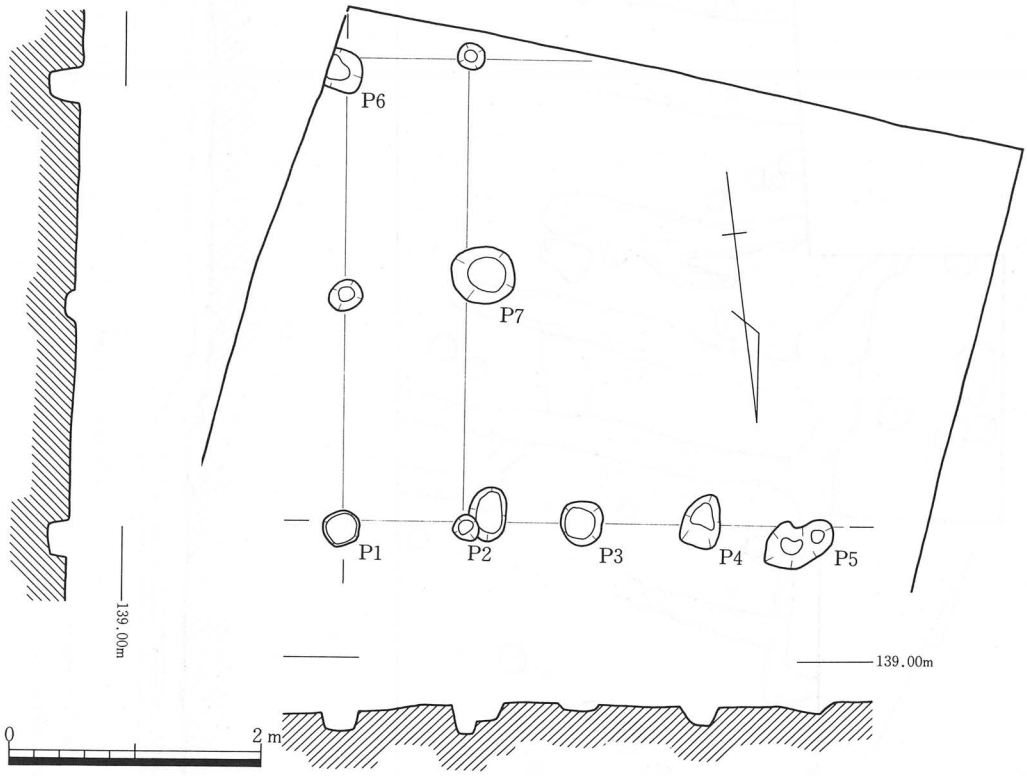
遺構

〈建物〉　調査区の西側に1部検出された。桁行4間（4m）以上×梁行2間（3.6m）、桁行柱間1m、梁行柱間1.8m、主軸方向N－55°－Wの掘立柱建物である。柱穴は径0.2～0.3m、深さ0.20mを計る。西側の桁行は調査区外にのびる。建物として他にピットも検出されたが復元できたのはこの1棟のみである。

実測可能な遺物は検出されなかった。



第29図　小塩遺跡遺構配置図・土層図



第30図　建物１遺構実測図

〈溝１～６〉　調査区の東側から溝７からN－50°－Wに振りながら平行に伸びる溝群である。溝の幅は0.5m、深さ0.2mで、溝１と溝２の間は0.9m、溝２と溝４の間は2.8m、溝４と溝５の間は0.9m、溝３は他の溝とは性格を異にするようで形態も不定形である。

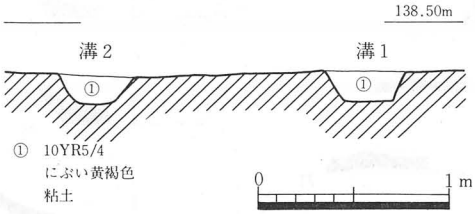
実測可能なものは溝１から杯蓋（63)、杯身高台部（64)、溝２から杯身口縁部（65・66）が出土している。

〈溝７〉　溝１～６に直行する溝で、N－50°－Eに振りながら伸び、調査区外に走る。西南端は直角に東北に屈曲する。溝の幅0.5m、深さ0.2m。

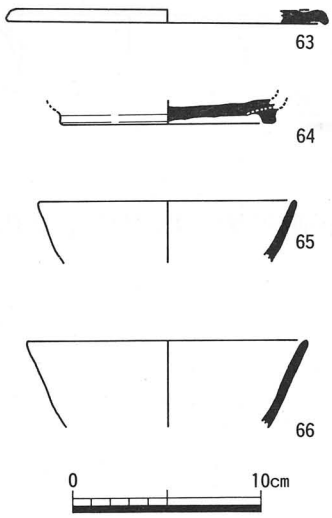
実測可能な遺物は出土しなかった。

遺物

遺物は須恵器が大半を占め、他に少量の土師器が見られる。いずれも小片である。



第31図　溝１・２遺構実測図



第32図　溝１・２出土遺物実測図

〈土師器〉　包含層から甕（77）が１点出土している他は実測可能なものはなかった。

（77）は口縁部のみであるが、体部はあまり張りのない形態のものであると思われる。口縁端部はやや内側へつまみ上げておさめる。

〈須恵器〉　蓋杯（63～66、70～74）、皿（68）、小型長頸壺と考えられる底部（75）、長頸壺（76）が出土している。

蓋（63、70、71）はいずれも天井部が水平で、端部を下方へ屈曲させた形のものである。口径は13～18㎝と大小あり、それに伴うと思われる身は高台径7.5㎝の（75）が最小、高台径11.0㎝の（64）が最大である。高台はいずれもハリツケで、高台見込はヘラ切り未調整のもの（64）とヘラケズリ調整を施すもの（72、74）がある。

皿（68）は口径16.6㎝で、口縁端部は狭小な面をなす。

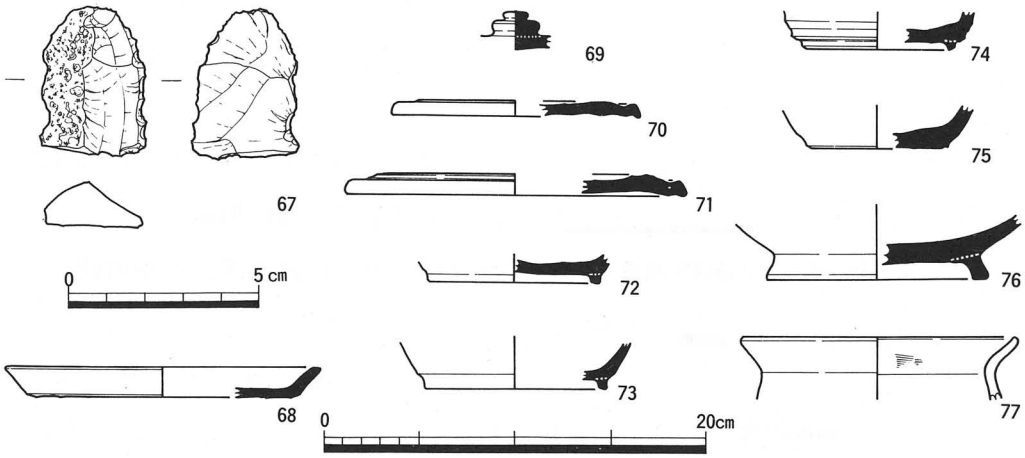
（74）は長頸壺の底部と思われる。平底で、底部外面はヘラ切リ未調整である。（76）は長頸壺の底部で、ハの字形に開くしっかりとした高台を有する。これらの須恵器は概ね、陶邑編年Ⅳ－４に相当するものである。

〈石製品〉　包含層より剝片が１点出土している。自然面を１部に残し、ネガティブな面で形成されており、周縁部を刃部として使用した可能性がある。

４，まとめ

当遺跡は、遺物の表面分布から見ると６㌶に及ぶ大規模にものである。今回の調査はその面積から見て微々たるものである。しかし、当遺跡において最初の調査であり、遺構の密度、遺物等について若干の知見を得た。

遺構は建物と溝群であった。溝群はその形態から耕作溝の可能性がある。遺



第33図　包含層出土遺物実測図

物は実測可能なものは少なかったが、時期的には陶邑編年Ⅳ－４になり、市内のこの時期の遺跡としては初見である。

第2表　烏帽子形城跡出土遺物観察表

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
1	第1トレンチ	土師質土器	小皿	口径 10.0cm 残存高 2.1cm	密	やや軟	外内；にぶい黄橙 断；浅黄橙	外面底部は指圧痕が著しい。他の残存部はヨコナデ。	
2	第1トレンチ	瓦	軒平瓦	残存長 6.8cm 瓦当厚 6.8cm	密	堅緻	凹凸；灰 断；明緑灰	瓦当文様は波状文。周縁部の高さは0.5cm、幅は、上縁0.8cm、下縁1.0cm、側縁2.5cmで均一でない。凹面はヨコナデ調整。	
3	第1トレンチ	瓦	掛平瓦	残存長 16.7cm 瓦当厚 4.65cm	密	堅緻	凹凸；灰 断；灰白	瓦当文様は波状文。周縁部の高さは0.5cm、上下縁1.0cm、側縁2.5cmで均一でない。袖は厚さ1.7cm、高さ4.5cmで、凹面側端部に貼り付けられている。全面ナデ調整が施されている。	
4	第1トレンチ	瓦	丸瓦	全長 31.5cm 幅 15.0cm 玉縁長 5.3cm	密	堅緻	凹凸；灰 断；灰白	凸面は縦方向のヘラナデ。凹面は板状工具によるナデ。木口部は幅6.0cm／瓦厚さの3／4程度を面取りする。	
5	第1トレンチ	瓦	丸瓦	全長 32.0cm 幅 14.2cm 玉縁長 4.6cm	密	堅緻	凹凸；灰 断；灰白	凸面は縦方向のヘラナデ。凹面は板状工具によるナデ。木口部は幅6.3cm／瓦厚さの1／2程度を面取りする。	
6	第1トレンチ	瓦	平瓦	全長 29.0cm 狭幅 21.6cm 厚 2.1cm	密	やや軟	凹；灰 凸；灰、浅黄 断；灰白	凹面は縦方向の無文のタタキ。凸面はナデ調整。	摩滅著しい。
7	第1トレンチ	瓦	用途不明瓦片	厚 1.7cm	密	堅緻	外；灰 断；灰白	凹面側に断面三角形の突帯が弧を描いて巡る。凹面側上端部に貫通しない小孔（釘穴か？）を有する。突帯は貼り付け。凸面は無文のタタキ、小孔の裏は格子状タタキ。	
8	第2トレンチ	土師質土器	小皿	口径 10.2cm 残存高 2.2cm	密	やや軟	外内；浅黄橙 断；褐灰	外面底部は指圧痕が顕著に残る。他の残存部はヨコナデ。	口縁部に煤付着。
9	第2トレンチ	瓦	丸瓦	全長 31.4cm 幅 12.5cm	密	やや軟	凹凸；灰 断；灰白	凸面は縦方向のヘラナデ。凹面は板状工具によるナデ調整を施すが、布目が残る。	

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
10	第2トレンチ	瓦	平瓦	全長 29.4cm 狭幅 21.0cm 厚 1.8cm	密	やや軟	灰～灰白	凹面狭幅部に幅1.0cmで面取りする。凹面は布目をナデ消し。凸面は縄目をナデ消し。	摩滅著しい。
11	第3トレンチ	白磁	皿	口径 11.8cm 高台径 6.8cm 高台高 0.5cm 器高 3.2mg	密	堅緻	胎土；青みががった白 釉；白	口縁部は違反し、端部は鋭い。畳付以外はやや厚めに施釉する。	
12	第3トレンチ	陶器	天目茶碗	口径 11.2cm 残存高 4.1cm	密	やや軟	胎土；黄 釉；黒褐	口縁部は外反し丸い。薄い鉄釉がかかる。	小片。
13	第3トレンチ	土師質土器	羽釜	口径 20.8cm 鍔径 26.0cm 残存高 5.7cm	密	軟	外；橙 内；赤褐 断；浅黄橙	体部内面はハケ目。外面は横方向のヘラケズリ。他の残存部はヨコナデ。鍔部はハリツケ。	体部外面は煤付着。小片。
14	第3トレンチ	銅製品	飾り金具	残存長 7.2cm 幅 1.0cm 厚 0.1cm	—	—	—	断面形はU字形で、取り付け用の有孔の突起を2箇所に有する。突起は接合。	
15	第3トレンチ	鉄製品	不明破片	残存長 3.1cm 幅 2.2～2.7cm	—	—	—	断面は隅の丸い長方形を呈する。	
16	第4トレンチ	瓦	丸瓦	残存長 24.6cm 幅 22.5cm	密	堅緻	凸凹；灰 断；灰白	凸面は縦方向のヘラナデ。凹面は布目を残す。	
17	第4トレンチ	瓦	平瓦	残存長 27.9cm 広幅 26.5cm 厚 3.0cm	密	堅緻	凸凹；灰 断；灰白	凹面側は幅の広い無文のタタキ。凸面はナデ調整を施す。	二次焼成を受ける。
18	第5トレンチ （最下層） （第3層）	瓦	平瓦	残存長 10.4cm 残存幅 10.5cm 厚 1.9cm	やや粗	堅緻	灰～灰白	両面共にナデ調整で、離れ砂をしいた痕がある。	凹面に二次焼成痕がある。
19	第5トレンチ （上層） （第1層）	土師質土器	火舎	口径 24.7cm 底径 19.6cm 器高 6.1cm	やや粗	やや軟	外；浅黄橙 内；にぶい黄橙 断；褐灰	口縁部は肥厚し、面をなす。ナデ調整。	二次焼成を受ける。摩滅著しい。

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
20	第5トレンチ（上層）（第1層）	石製品	砥石	残存長 4.5cm 残存幅 3.1cm	—	—	橙	切り石。残存する面に使用痕が見られる。	
21	第6トレンチ（第2層）	陶器	すり鉢	底径 12.8cm 残存高 4.2cm	密	堅緻	内外；灰赤 断；灰、赤褐	体部は回転ナデ。底部と体部の接合部は粗い指ナデで、そのための粘土のはみ出しや、指圧痕は未調整。内面のクシ目は乱方向。	内面は使用による摩耗が認められる。底部外面に自然釉付着。
22	第6トレンチ（第2層）	陶器	すり鉢	残存高 6.4cm	密	堅緻	内外；橙、にぶい黄橙 断；にぶい黄橙、灰	回転ナデ調整。内面のクシ目は乱方向。	内面は使用による摩耗が認められる。小片。
23	第6トレンチ（第1層）	陶器	壺（底部）	底径 8.9cm 残存高 8.1cm	密	堅緻	外；にぶい橙 内断；橙	底部は型造りで外面は未調整。他は回転ナデ。凹凸が著しい。体部外面にヘラによる線刻文様がある。	
24	第6トレンチ（第1層）	瓦	平瓦	全長 29.6cm 広幅 23.3cm 厚 1.7cm	密	やや軟	凹凸；灰 断；灰白	凹面狭幅部に幅0.8cmで面取りを施す。両面ともナデ調整。	二次焼成を受ける。
25	第7トレンチ	石製品	石鏃	最大長 4.0cm 最大幅 1.8cm 最大厚 0.65cm 質量 4.3g	サヌカイト	—	—	平基無茎式。断面形はレンズ形を呈する。片面は縄調整を施すが、反対面は粗い剝離調整である。	

第3表　加賀田神社遺跡出土遺物

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
26	土壙1	土師質土器	甕	底径 20.6cm 残存高 21.4cm	密	堅緻	浅黄橙、灰白	底部は型造りで外面は未調整。体部外面は粗いタタキ。内面は板状工具によるナデ。底部と体部の接合部分は内面ヨコナデ。	
27	土壙1	土師質土器	十能	最大幅 13.9cm 器高 3.6cm 残存長 11.6cm	密	堅緻	外；にぶい黄橙 内；浅黄橙 断；浅黄橙、橙	型造り。内面は側面をヨコナデ。底面を不定方向のナデ。小口部分はヨコナデ。外面は小口部分を面取りし、他は未調整。	外面小口部分は摩耗している。
28	土壙3	土師質土器	小皿	口径 7.0cm 残存高 1.0cm	密	堅緻	浅黄橙	口縁部はヨコナデ。底部内外面とも不定方向のナデ。	

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
29	土壙3	土師質土器	小皿	口径 8.0cm 器高 1.0cm	密	堅緻	浅黄橙	こうえんぶはヨコナデ。底部外面は指圧痕を残し、内面は不定方向のナデ。	
30	土壙3	土師質土器	小皿	口径 8.1cm 残存高 1.3cm	密	堅緻	橙	口縁部はヨコナデ。底部外面は指圧痕を残り、口縁部との境に段がつく。底部内面は不定方向のナデ。	
31	土壙3	土師質土器	火舎	口径 23.8cm 残存高 5.65cm	密	堅緻	外内；褐灰 断；橙	残存部はヨコナデ。口縁の1部に浅く横長に切り込んだ部分がある。内面に巻き上げの痕が残る。	
32	pit2	瓦器	椀	口径 10.8cm 残存高 2.6cm	やや粗	やや飲 炭素の吸着不充分	灰白	口縁部はヨコナデ。底体部外面指圧痕顕著。内面は不定方向にナデ調整。	
33	包含層	土師質土器	小皿	口径 6.2cm 器高 1.1cm	密	堅緻	橙	口縁部は外反し、丸い。内面口縁部はヨコナデ、底部は指圧痕が残る。	外面に炭化物付着。
34	包含層	土師質土器	小皿	口径 7.6cm 器高 1.0cm	密	やや軟	外内；橙 断；浅黄橙	口縁部はヨコナデ。底部外面は指圧痕が残る。内面はヘラ状工具による放射状の圧痕が残る。圧痕は半径2.4cmで時計回りに施されている。	
35	包含層	土師質土器	小皿	口径 7.0cm 器高 1.0cm	密	堅緻	浅黄橙	口縁部はヨコナデ。底部内面はヘラ状工具による放射状の圧痕が残る。圧痕は半径2.5cm出反時計回りに実施されている。	
36	包含層	土師質土器	小皿	口径 6.6cm 器高 1.0cm	密	堅緻	橙	底部はやや凹底気味。口縁部はヨコナデ。底部は内外面とも不定方向のナデ。	
37	包含層	土師質土器	小皿	口径 6.4cm 器高 1.0cm	密	堅緻	橙	口縁部はヨコナデ。底部外面指圧痕が残る。内面は不定方向のナデ。	口縁部に煤付着。
38	包含層	土師質土器	小皿	口径 7.8cm 器高 0.95cm	密	堅緻	外；浅黄橙～にぶい黄褐 内；橙～灰褐 断；浅黄橙～橙	口縁部はヨコナデ。貞部内面は不定方向のナデ、外面は指圧痕が残る。	二次焼成を受けている。

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
39	包含層	土師質土器	小皿	口径 8.6cm 器高 1.1cm	密	堅緻	外；浅黄橙～橙 内断；橙	口縁部はヨコナデ。底部内面は不定方向のナデ、外面は指圧痕が残る。	
40	包含層	土師質土器	小皿	口径 7.8cm 器高 1.1cm	密	堅緻	橙～灰褐	口縁部はヨコナデ。底部内面は不定方向のナデ、外面は指圧痕を残す。	
41	包含層	土師質土器	小皿	口径 7.4cm 器高 1.35cm	密	やや軟	浅黄橙	口縁部はヨコナデ。底部は内外面に指圧痕が残る。	
42	包含層	土師質土器	小皿	口径 7.6cm 残存高 1.4cm	密	堅緻	橙	口縁部はヨコナデ。底部内面不定方向のナデ、外面は指圧痕を残す	
43	包含層	土師質土器	小型椀	口径 7.0cm 高台径 4.4cm 高台高 0.5cm 器高 2.05cm	密	堅緻	灰白	高台はハリツケ、指圧痕を残す。他はヨコナデ。	
44	包含層	土師質土器	椀	口径 11.4cm 器高 2.15cm	やや粗	やや軟	にぶい黄橙	口縁部はヨコナデ、他は不定方向のナデ。	
45	包含層	瓦器	椀	口径 11.4cm 器高 3.0cm	やや粗	軟	外；明青灰 内断；灰白	内面は不定方向のナデ、外面口縁部はヨコナデ、底部は指圧痕を残す。	
46	包含層	瓦器	椀	口径 10.8cm 残存高 2.9cm	密	やや軟	外内；灰、灰白 断；灰白	口縁部はヨコナデ。底部内面は不定方向のナデ、外面は指圧痕が顕著に残る。	
47	包含層	瓦器	椀	口径 10.2cm 器高 2.0cm	密	やや軟	灰白	内面は不定方向のナデ。外面口縁部はヨコナデ、底部は指圧痕が顕著に残る。	
48	包含層	瓦器	椀	口径 11.4cm 残存高 1.85cm	やや粗	やや軟	灰白	内面はハケ目調整。外面口縁部はヨコナデ、底部は指圧痕が残る。	小片。

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
49	包含層	瓦質土器	甕	口径 21.0cm 残存高 4.0cm	密	やや軟	外；黒褐 内断；浅黄橙	口縁端部は外反し丸い。口縁部はヨコナデ。頸部外面は粗いタタキ、内面はハケ目。	小片。
50	包含層	瓦質土器	羽釜	口径 19.6cm 鍔径 25.6cm 残存高 5.7cm	密	堅緻	外；暗灰、褐灰 内；灰白 断；暗オリーブ灰	口縁端部は内傾する面をなす。鍔はハリツケ。口縁部はヨコナデ。体部内面はハケ目、外面はヨコ方向のヘラケズリ。	体部外面に炭化物付着。
51	包含層	瓦	軒丸瓦	全長 37.45cm 瓦当径 14.8cm(復 尻弦幅 13.6cm 玉縁長 6.5cm	密	堅緻	凹凸；灰～灰白 断；灰白	瓦当文様は三つ巴文に珠文帯を配する。巴の尾の長さは1／2回転、珠文は25個以上で、巴の外側には圏線を1条巡らす。周縁部の幅は1.5cm、高さ1.2cmである。玉縁部に径1.5cmの釘穴がほぼ垂直に貫通する。凸面はヘラナデ、凹面は板状工具によるナデ。	
52	包含層	瓦	軒丸瓦	全長 37.4cm 瓦当径 15.6cm(復 尻弦幅 15.5cm 玉縁長 5.3cm	密	堅緻	凸凹；灰 断；灰白	瓦当文様は三つ巴文に珠文帯を配する。巴の尾の長さは1／2回転程で、巴の外側に圏線を1条巡らす。周縁部の幅は1.3cm、高さ1.0cm。玉縁部に径1.5cmの釘穴がやや前方に向かって貫通する。凸面はヘラナデ、凹面は板状工具によるナデ。	
53	包含層	瓦	軒丸瓦	全長 35.5cm 瓦当径 15.2cm 尻弦幅 15.5cm 玉縁長 5.0cm	密	やや軟 (表面剥落)	凸凹；浅黄、灰黄 断；にぶい黄橙	瓦当文様は三つ巴文に珠文帯を配する。珠文は17個、巴の尾の長さは1／2回転程で、その内の1つが伸びて圏線を形成する。周縁部の幅は2.0cm～2.3cm、高さ0.8cm。玉縁部の中心よりやや外側に、径1.8cmの釘穴がやや前方に向かって貫通する。凸面はヘラナデ、凹面は板状工具によるナデ。	
54	包含層	瓦	軒丸瓦	全長 36.1cm 瓦当径 15.9cm 尻弦幅 15.6cm 玉縁長 4.7cm	密	やや軟 (表面剥落)	浅黄橙	瓦当文様は三つ巴文に珠文を配する。珠文は17個、巴の尾の長さは1／2回転程で、その内の1つは伸びて圏線を形成する。周縁部の幅は2.3cm、高さ0.8cm。玉縁部には径1.4～0.6cmの釘穴がやや前方に向かって貫通する。凸面はヘラナデ、凹面は板状工具によるナデ。	
55	包含層	瓦	軒平瓦	全長 35.6cm 瓦当厚 5.3cm 瓦当幅 27.0cm 尻弦幅 26.1cm	密	堅緻	凸凹；灰 断；明緑灰	瓦当文様は均整唐草文で、両側のない郭線が1条巡る。周縁部は幅1.2cmで均一である。平瓦部の凹面後端には幅1.2cmで面取りを施す。平瓦部は両面とも縦方向のヘラナデ。凹面側にはなれ砂を敷いた痕がある。	
56	包含層	瓦	軒平瓦	残存長 13.8cm 瓦当厚 4.2cm 瓦当幅 27.0cm 尻弦幅 26.1cm	密	堅緻	凹；オリーブ灰 凸断；灰	瓦当文様は均整唐草文で、郭線はない。文様は短く、両側端にまで達しない。周縁部は幅1.0cmで均一である。平瓦部は両面ともナデ調整。凹面側にはなれ砂を敷いた痕がある。	
57	包含層	瓦	軒平瓦	—	密	やや軟	灰白	瓦当文様は波状文。周縁部の幅は1.0cm、高さは0.5cmで均一である。	
58	包含層	瓦	丸瓦	全長 32.7cm 幅 14.1cm 玉縁長 4.6cm	密	堅緻	凸；暗灰黄 凹；灰 断；灰褐	凸面は縦方向のヘラナデ、凹面は板状工具によるナデ。木口部は幅6.0cmで瓦厚の1／4程度を面取りする。	

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
59	包含層	瓦	丸瓦	全長 25.2cm 幅 15.2cm 玉縁長 5.2cm	密	堅緻	明オリーブ灰	凸面は縦方向のヘラナデ、凹面は板状工具によるナデを施すが、成型時の布目が残る。玉縁部に径1.2cmの釘穴がやや前方に向かって貫通する。	
60	包含層	瓦	鬼瓦(部分)	—	密	やや軟	外；灰 断；灰白	ヘラ状工具によるオサエ、およびナデ調整。	
61	包含層	瓦	平瓦	全長 34.3cm 広幅 26.5cm 狭幅 25.0cm	密	やや軟 (炭素の吸着せず)	浅黄橙	凹面狭幅部に1.2cmの幅で面取りを施す。両面ともナデ調整。凹面側にはなれ砂を敷いた痕が残る。	
62	包含層	瓦	平瓦	残存長 21.0cm 狭幅 24.0cm	密	堅緻	灰褐	凹面狭幅部に幅1.1cmで面取りを施す。凹面はわずかに布目を残してナデ調整を施す。凸面はカキ目状の工具痕を残すがやはりナデ調整を施す。凸面側にはなれ砂を敷いた痕が残る。	

第4表　小塩遺跡出土遺物観察表

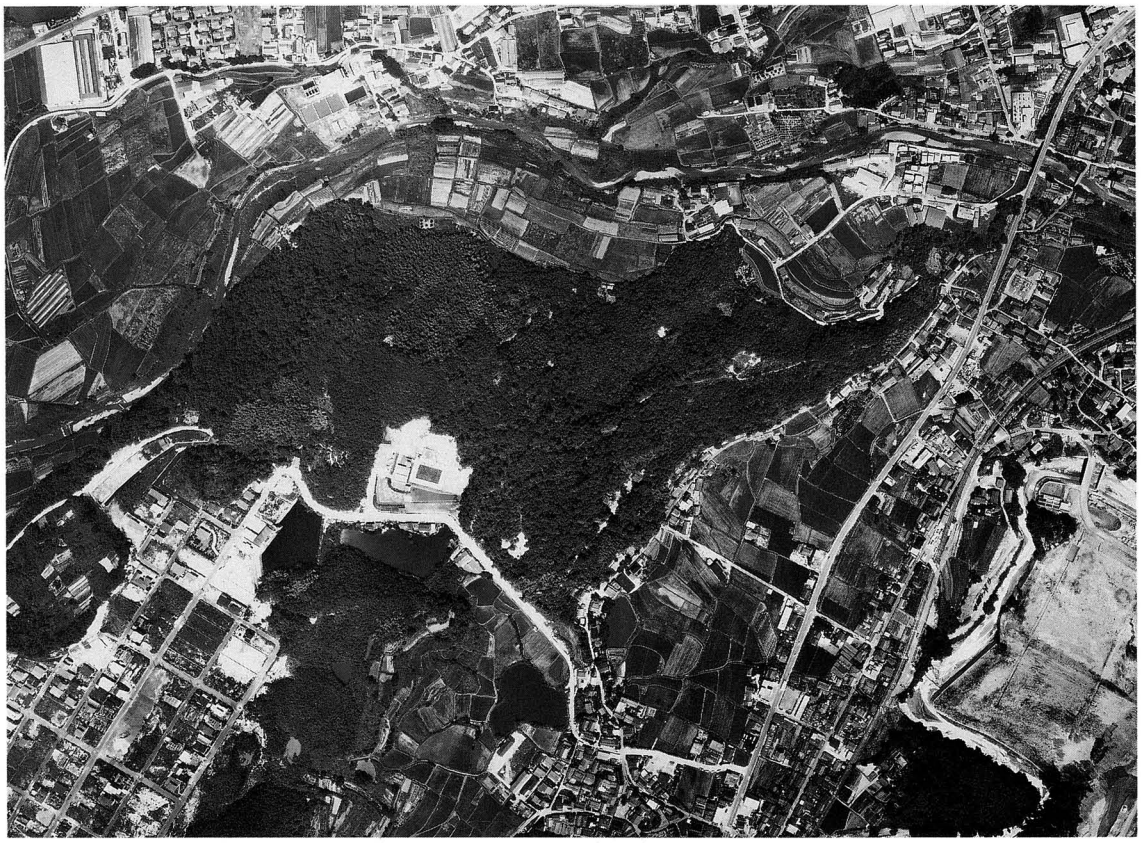
挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
63	溝1	須恵器	蓋杯(蓋)	口径 16.8cm 残存高 0.7cm	密	堅緻	灰白	残存部は回転ナデ。	小片。
64	溝1	須恵器	蓋杯(身)	高台径 11.0cm 高台高 0.5cm 残存高 0.7cm	密	堅緻	灰白	高台はハリツケ、回転ナデ。高台見込はヘラ切り未調整。底部内面は回転ナデ。	小片。
65	溝2	須恵器	蓋杯(身)	口径 13.5cm 残存高 3.3cm	密	堅緻	灰	残存部は回転ナデ。	小片。
66	溝2	須恵器	蓋杯(身)	口径 14.7cm 残存高 4.6cm	密	堅緻	灰白	残存部は回転ナデ。	小片。
67	包含層	石製品	小型刃器	最大長 3.9cm 最大幅 2.7cm 最大厚 1.1cm	サヌカイト	—	—	おおむね大剝離面と自然面で形成される。片面のみ周縁部に数か所の細調整と思われる加工痕が認められる。	

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
68	包含層	須恵器	皿	口径 16.6cm 器高 1.6cm	密	堅緻	外内；灰、灰白 断；灰白	口縁部は回転ナデ。底部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデの後定方向のナデ。	小片。
69	包含層	須恵器	蓋(つまみ)	つまみ径 2.5cm 残存高 2.05cm つまみ高 1.3cm	密	堅緻	外；灰、灰白 内断；灰白	蓋天井部にハリツケ、回転ナデ。天井部内面は回転ナデ。	外面に自然釉付着。
70	包含層	須恵器	蓋杯(蓋)	口径 12.9cm 残存高 0.8cm	密	やや軟	緑灰	天井部外面中央部は回転ヘラケズリ、その周囲は後に不定方向のナデを施す。他は回転ナデ。ロクロ回転方向右。	小片。
71	包含層	須恵器	蓋杯(蓋)	口径 17.7cm 残存高 1.1cm	密	堅緻	外内；灰白 断；灰	天井部外面は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転右。外面口縁部の上方に重ね焼の痕有り。	
72	包含層	須恵器	蓋杯(身)	高台径 8.8cm 高台高 0.45cm 残存高 1.55cm	密	堅緻	灰	高台はハリツケ。高台見込は篦切りの痕を残す粗い回転ヘラケズリの後高台接合時に回転ナデ。底部内面は回転ナデ。	小片。
73	包含層	須恵器	蓋杯(身)	高台径 9.4cm 高台高 0.5cm 残存高 2.5cm	密	堅緻	外内；灰白 断；灰、灰白	高台はハリツケ、回転ナデ。体部は内外面とも回転ナデ。底部内面は回転ナデの後定方向のナデ。	小片。
74	包含層	須恵器	小型長頸壺(底部)	底径 6.8cm 残存高 2.3cm	密	堅緻	外；灰 内；灰白 断；灰白、青灰、赤灰	底部外面は回転篦り未調整。他は回転ナデ。	
75	包含層	須恵器	蓋杯(身)	高台径 7.5cm 高台高 0.4cm 残存高 2.0cm	やや粗	堅緻	外内；青灰 断；青灰、赤灰	高台はハリツケ、回転ナデ。高台見込は回転ヘラケズリ。体部外面残存部は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。底部内面は回転ナデの後不定方向のナデ。	
76	包含層	須恵器	長頸壺(底部)	高台径 11.6cm 高台高 1.35cm 残存高 3.0cm	密	堅緻	灰白	高台はハリツケ、回転ナデ。底部内面は不定方向のナデ。体部外面は回転ヘラケズリ。高台見込は回転ナデ。	
77	包含層	土師器	甕(口縁部)	口径 14.2cm 残存高 2.4cm	密	やや軟	外；灰白、淡橙 内；灰褐、浅黄橙 断；灰白、浅黄橙	口縁部内面はハケ目。	剝離、摩耗著しい。小片。

図　　版

加賀田神社出土軒丸平瓦

図版1　遺構

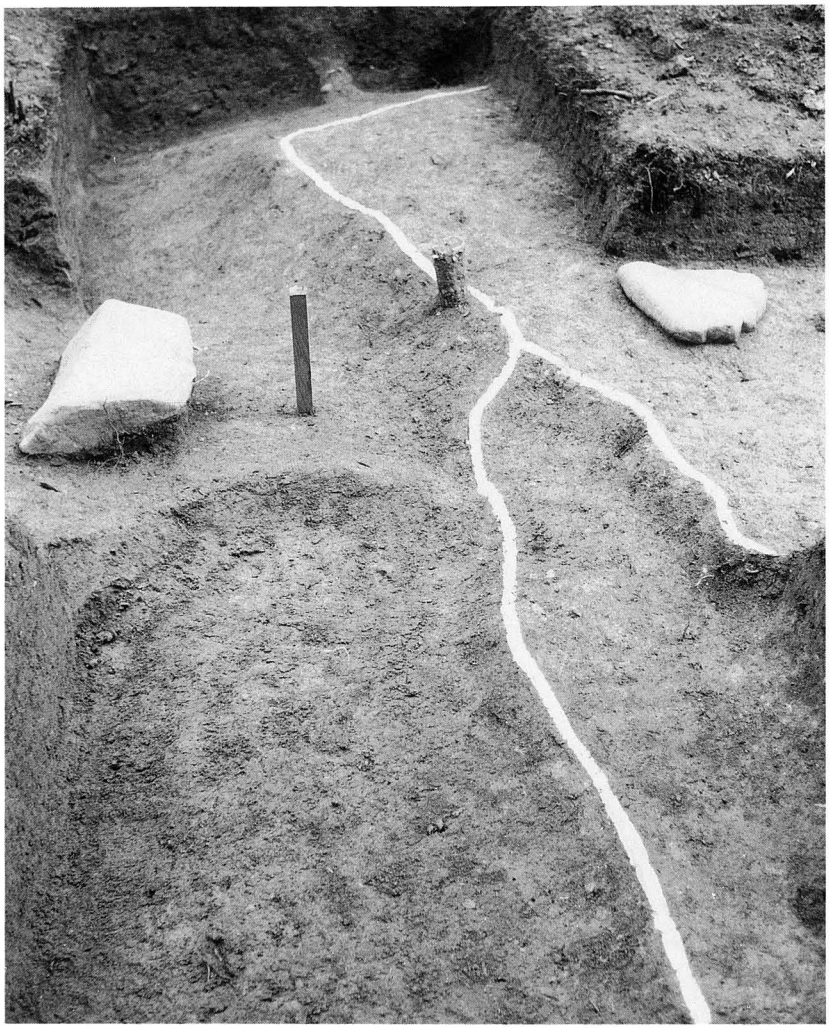


遺跡全景

第1・第2トレンチ（南から）

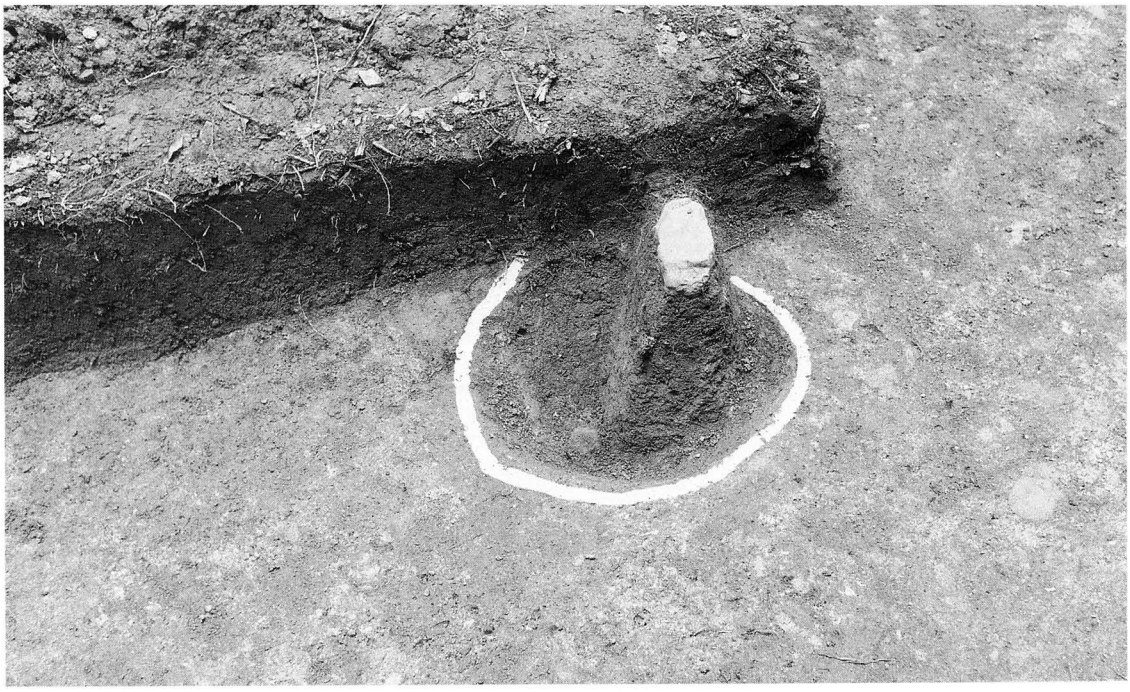
図版2　遺構

第1トレンチ礎石・遺物出土状況



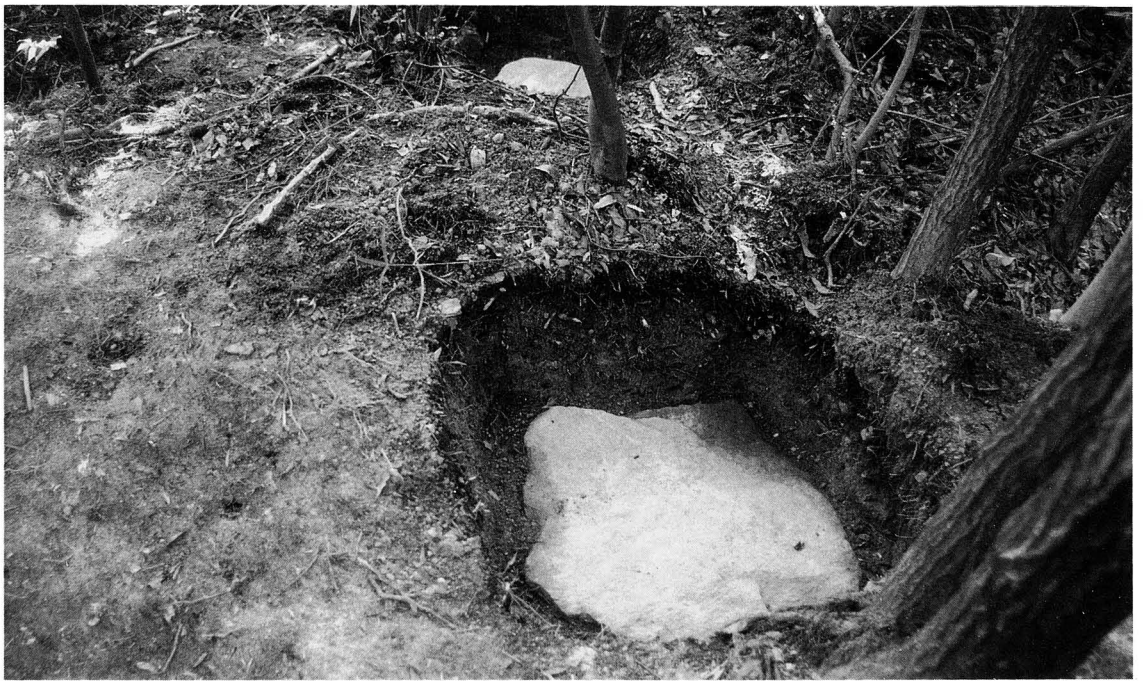
第3トレンチ（東から）

図版3　遺構



第1トレンチ下層ピット

第4トレンチ（北から）



第4トレンチ周辺礎石出土状況

第4トレンチ内礎石出土状況

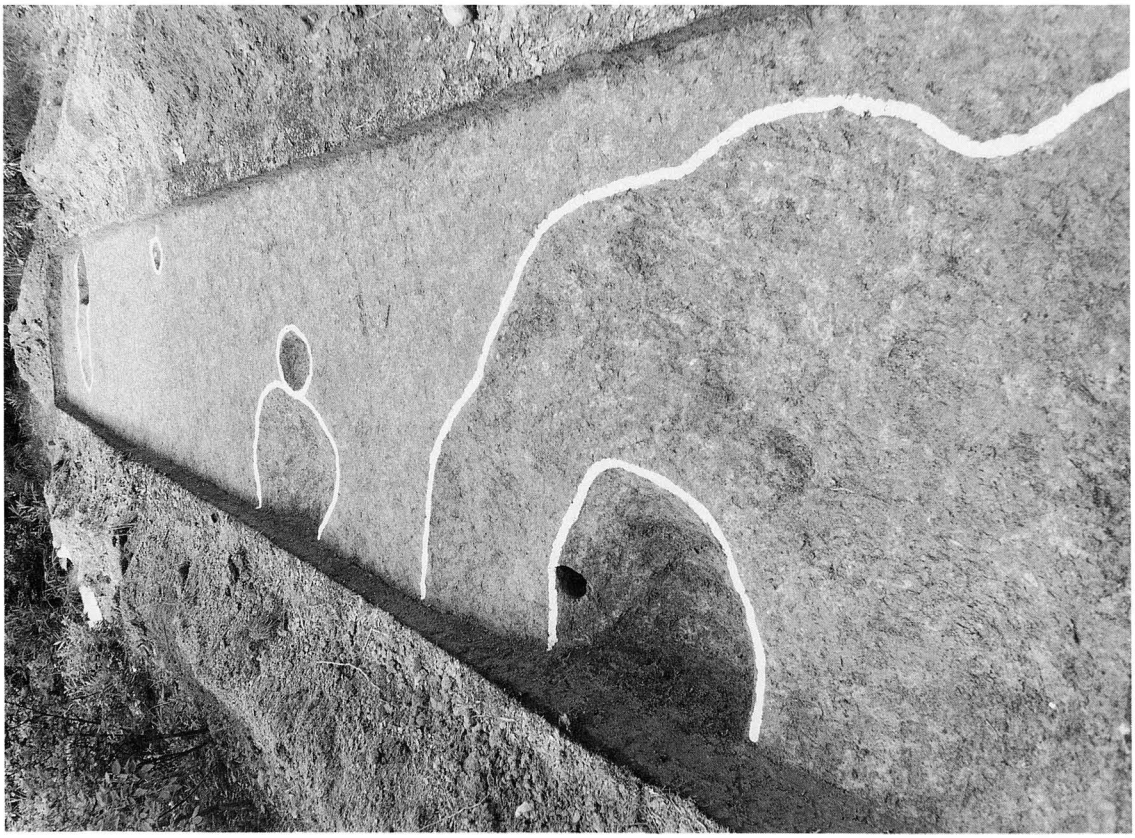
図版5　遺構

第6トレンチ（西から）

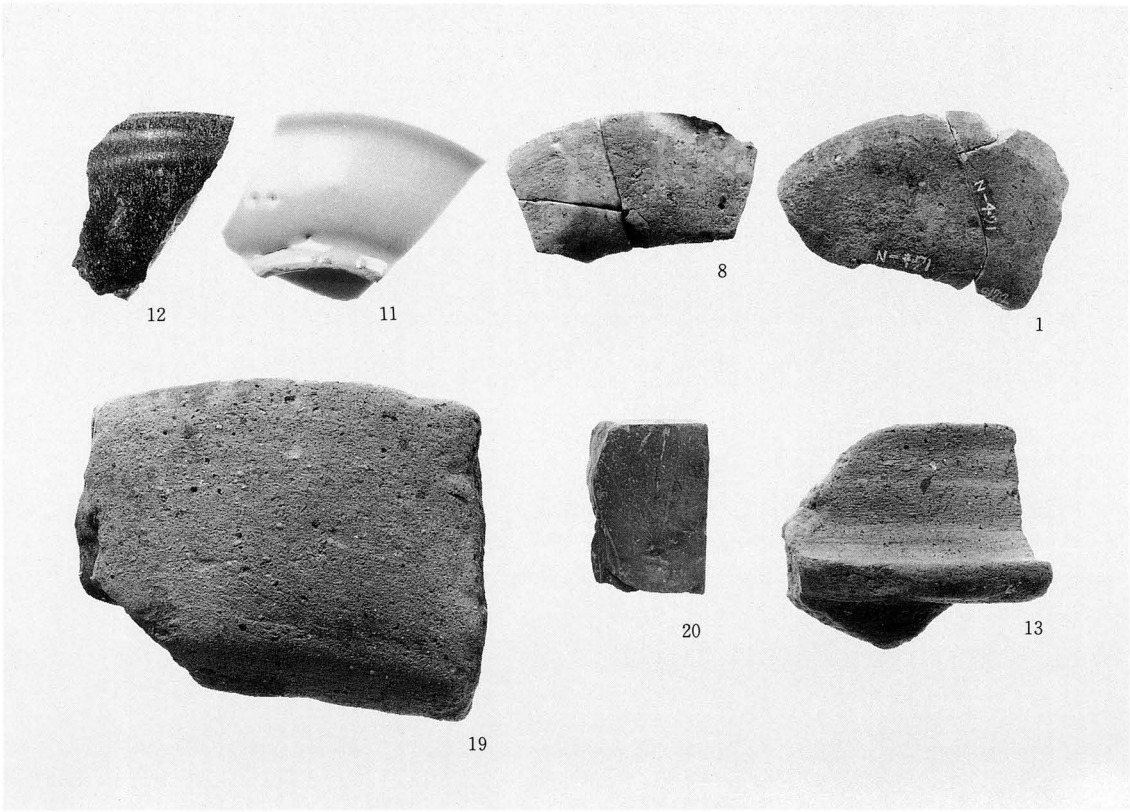
第7トレンチ（東から）

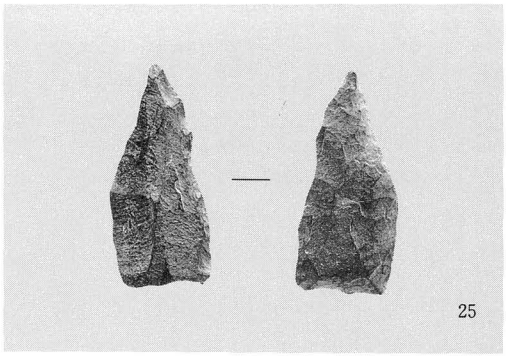
図版6　遺構

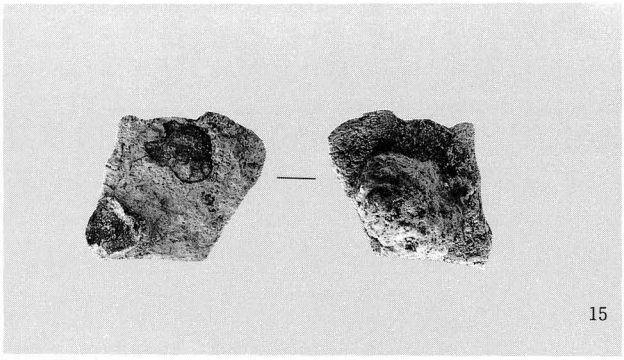
第9トレンチ（北から）

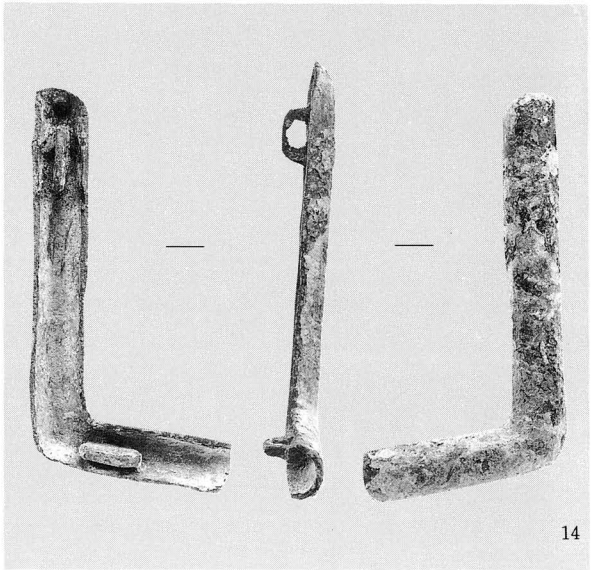


第8トレンチ（南から）

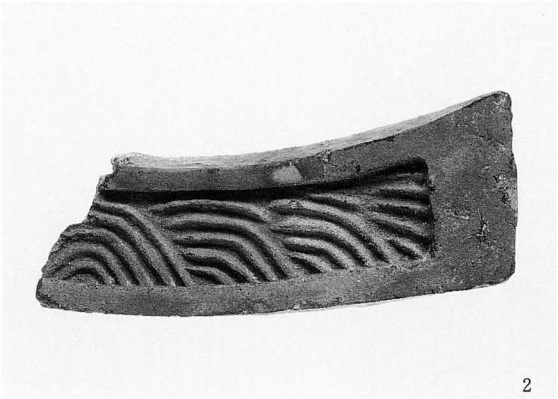


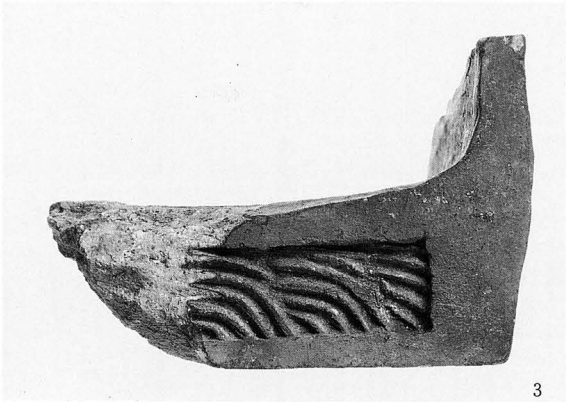


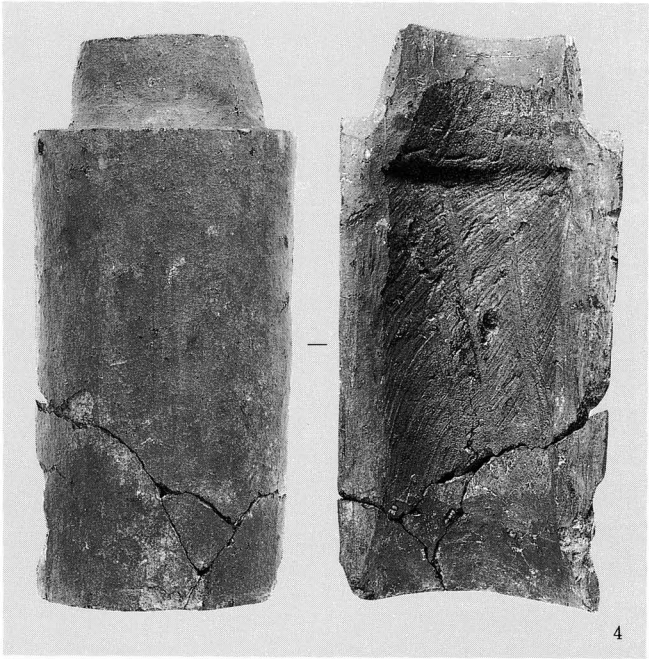




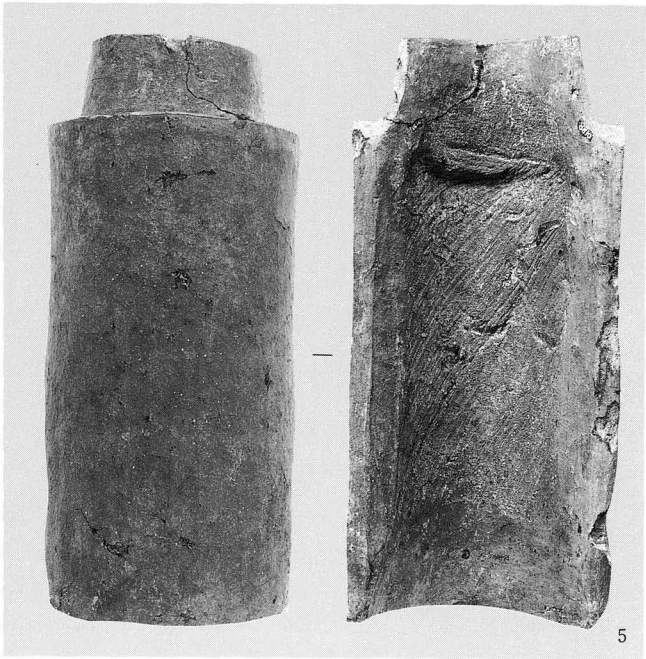
第1トレンチ（1）、第2トレンチ（8）、第3トレンチ（11～15）、第5トレンチ（19・20）、第6トレンチ（23）、第7トレンチ（25）


2


3

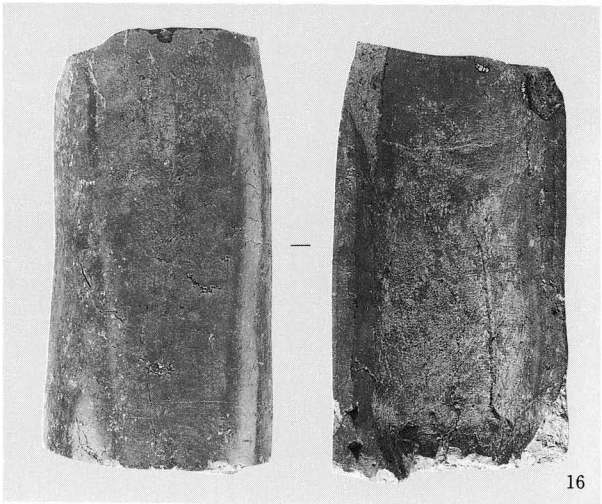

4

6


5

7

第1トレンチ（2～7）



第2トレンチ（9・10）、第4トレンチ（16・17）、第6トレンチ（24）

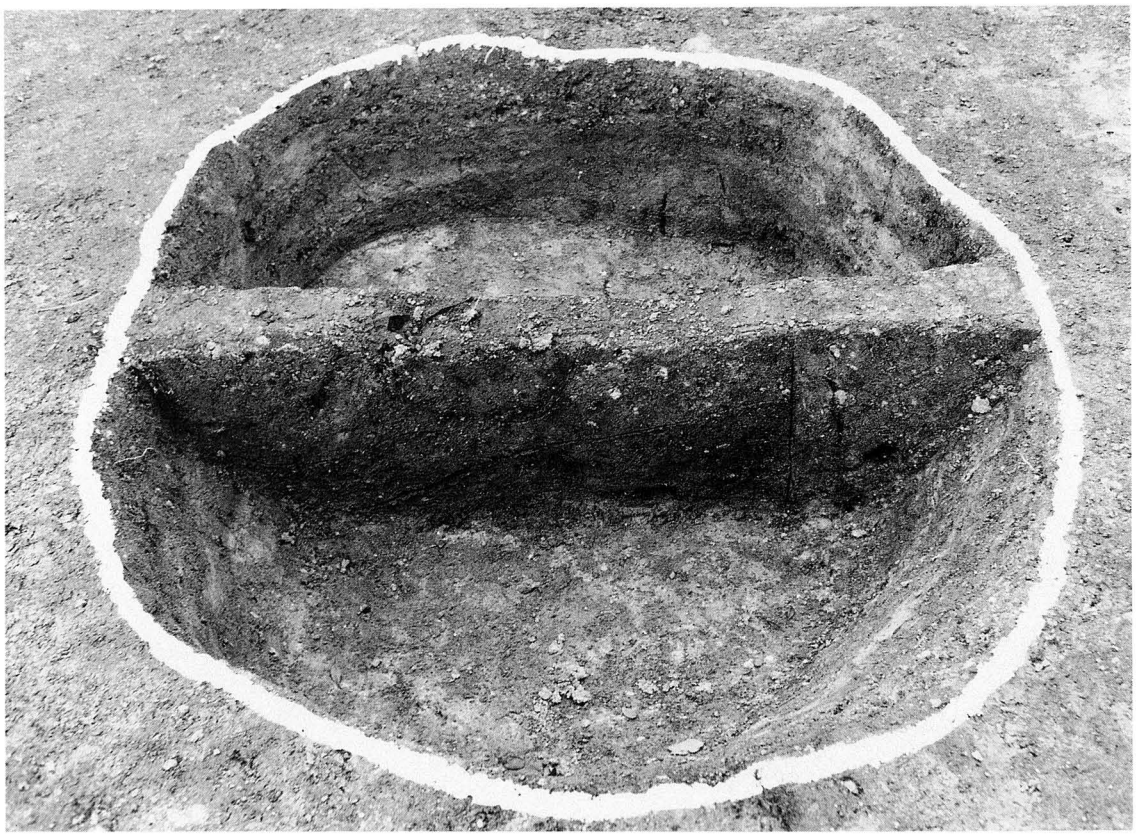
図版10　遺構

遺跡全景

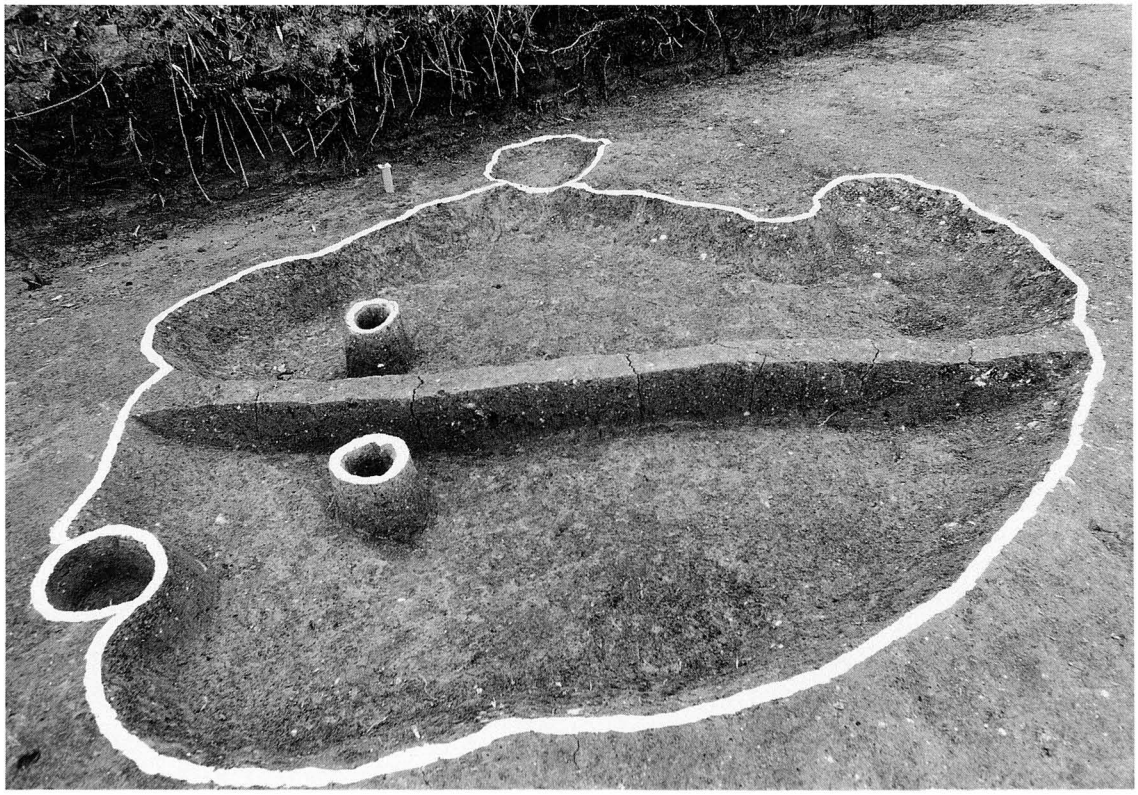
建物（北から）

土坑１・２（南から）

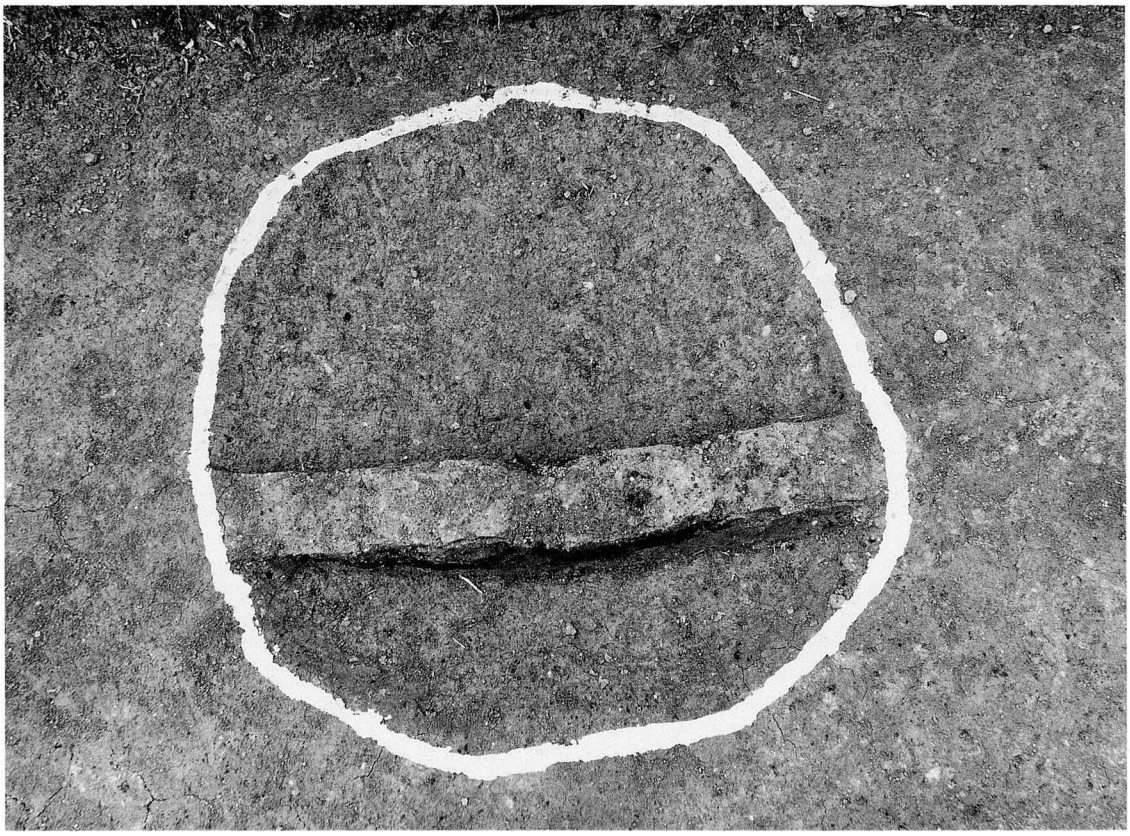
土坑１遺物出土状況



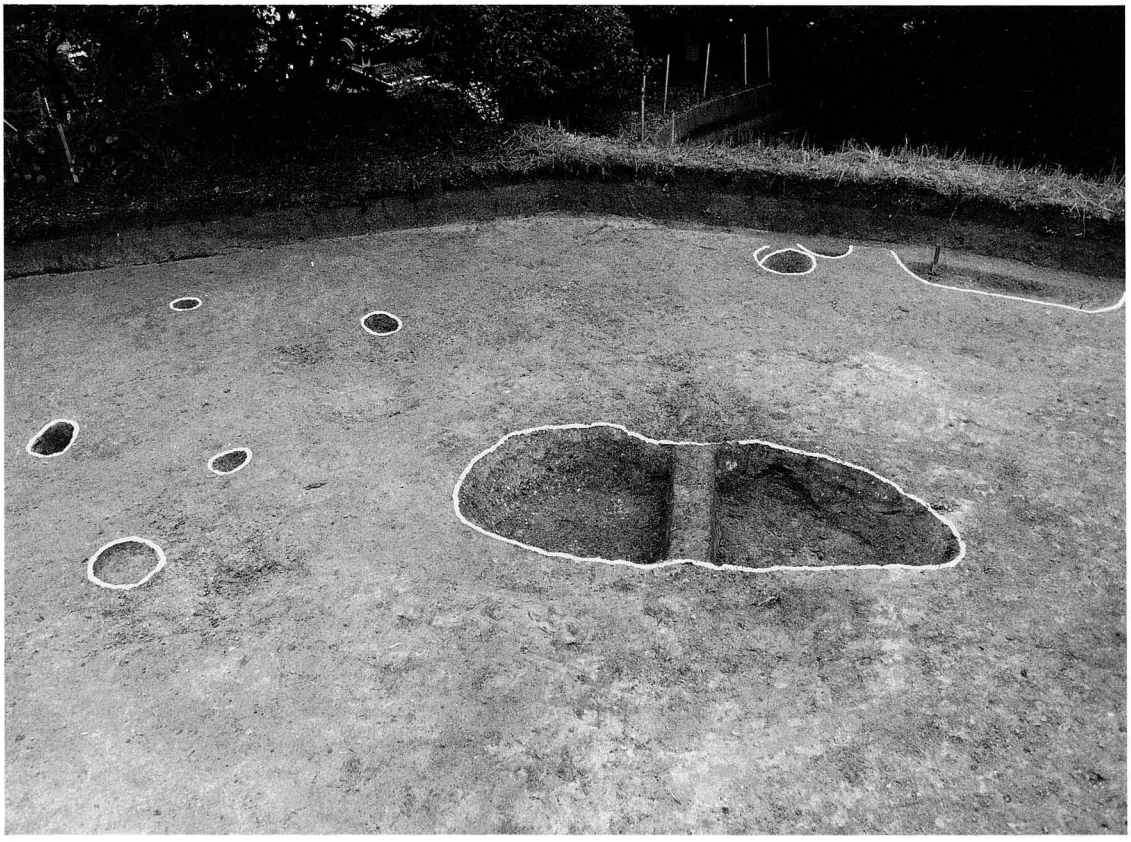
土坑2



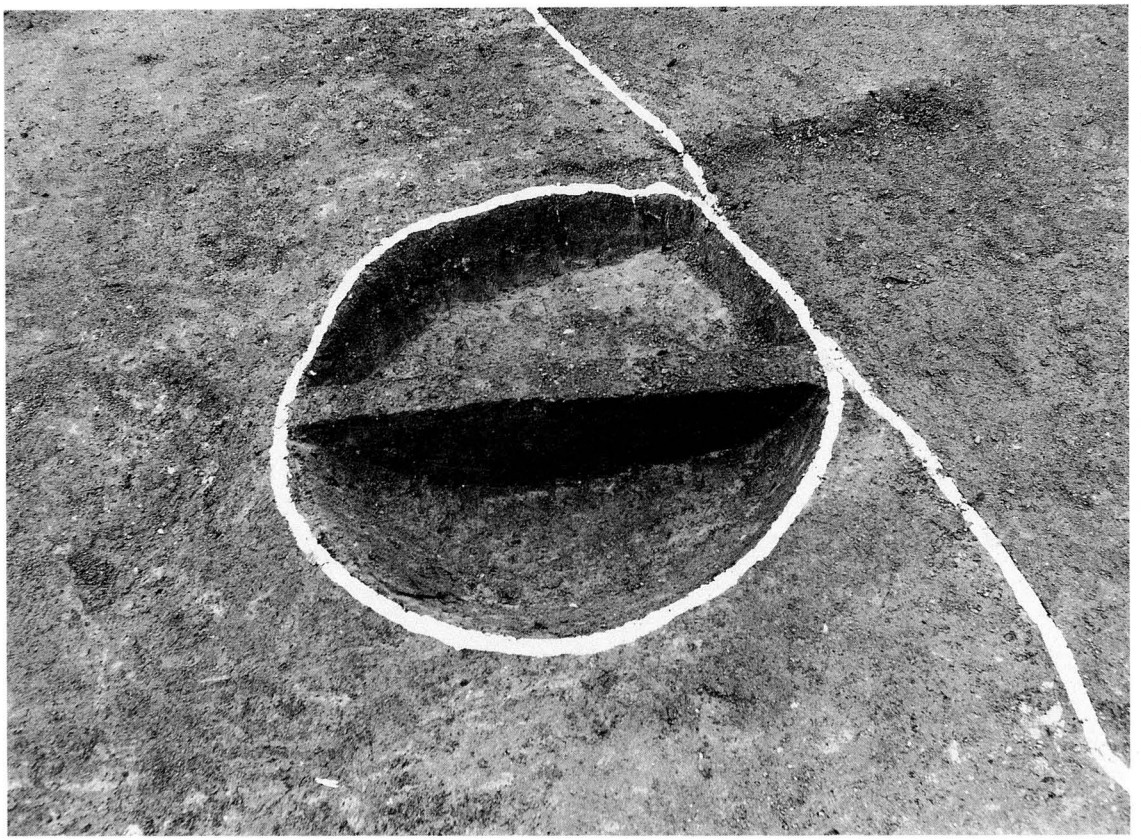
土坑3（東から）



土坑4



土坑5（西から）



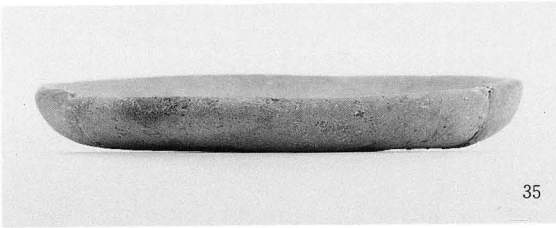
土坑6

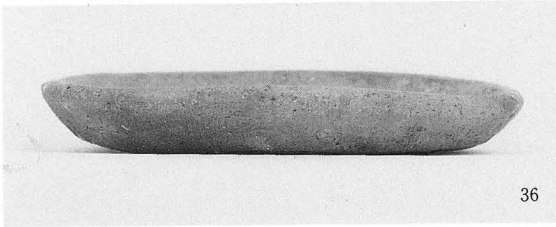
ピット1

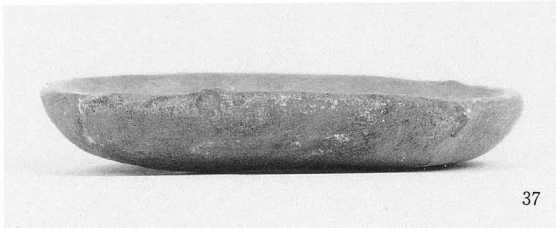
26

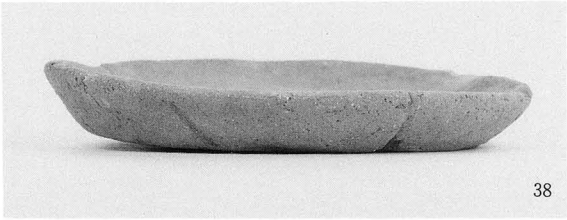
27

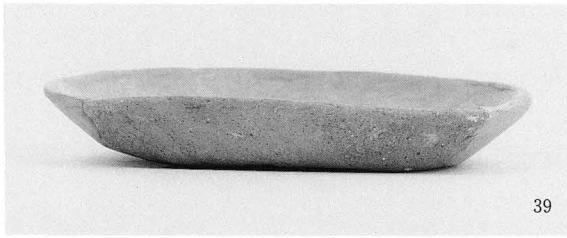
32

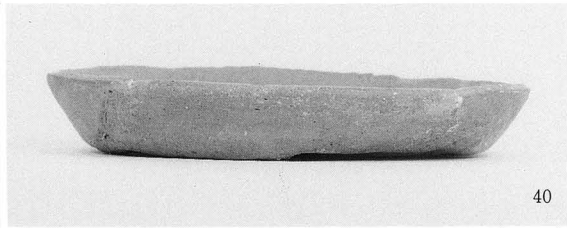

35


36


37


38


39


40

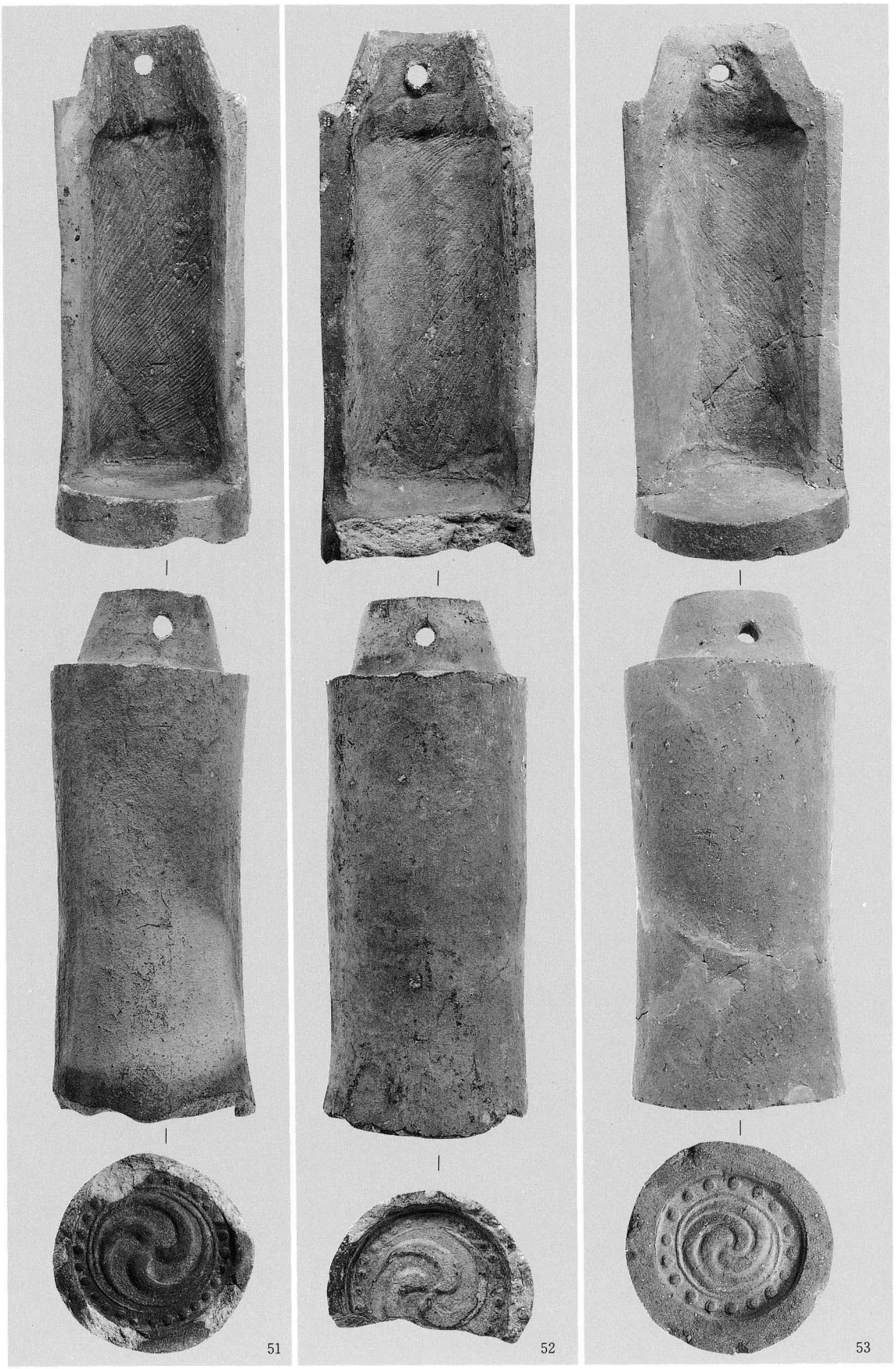
41

42

43

45

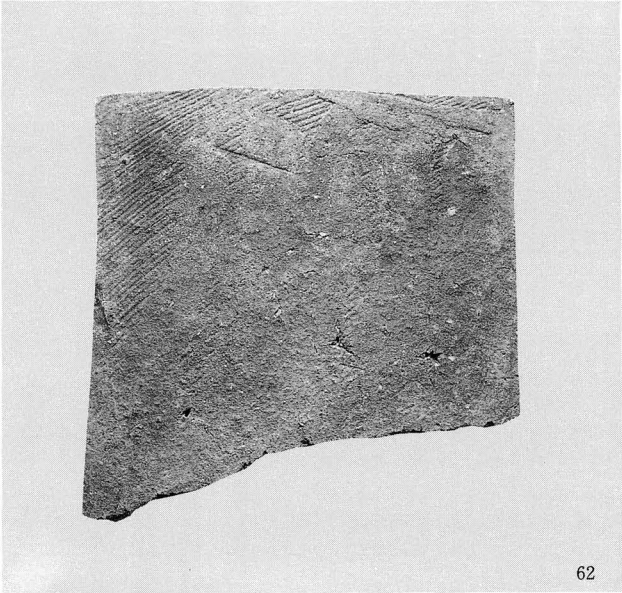
土坑１（26・27）、Ｐ２（32）、包含層（34～43、45）



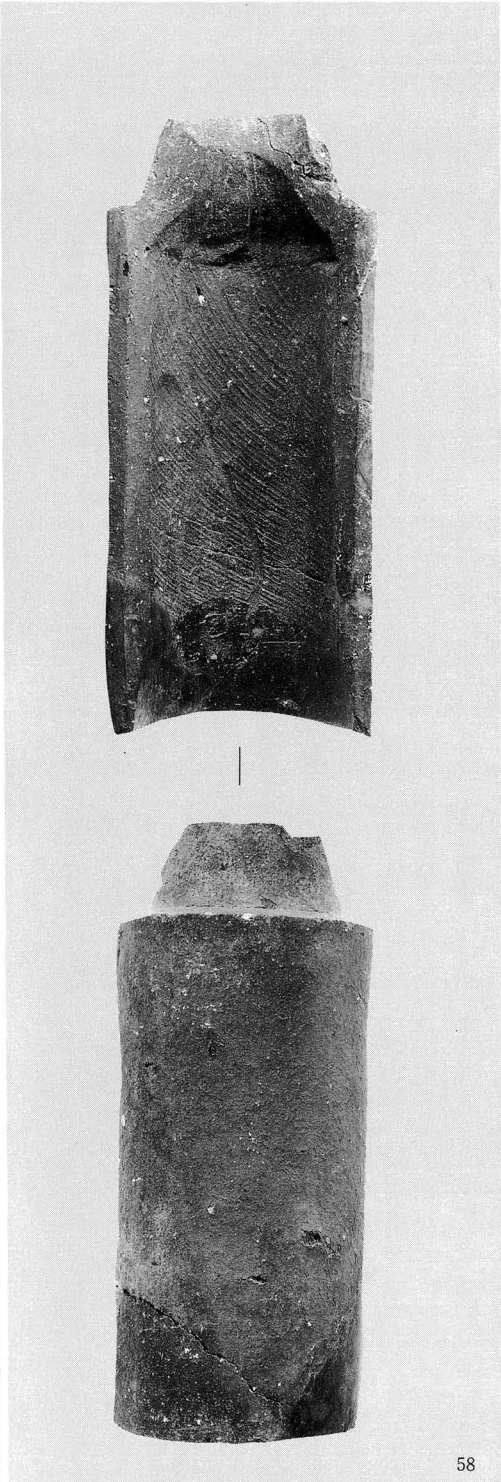
包含層（51、52、53）

55

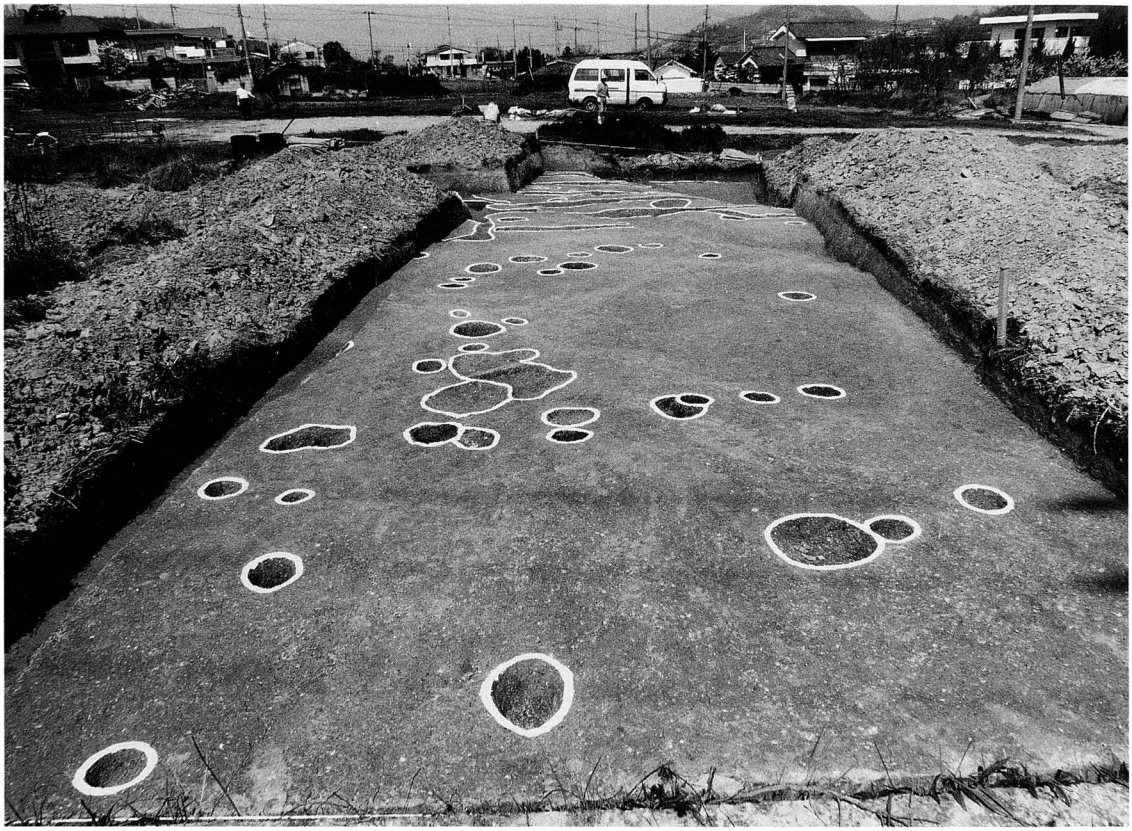
56


62

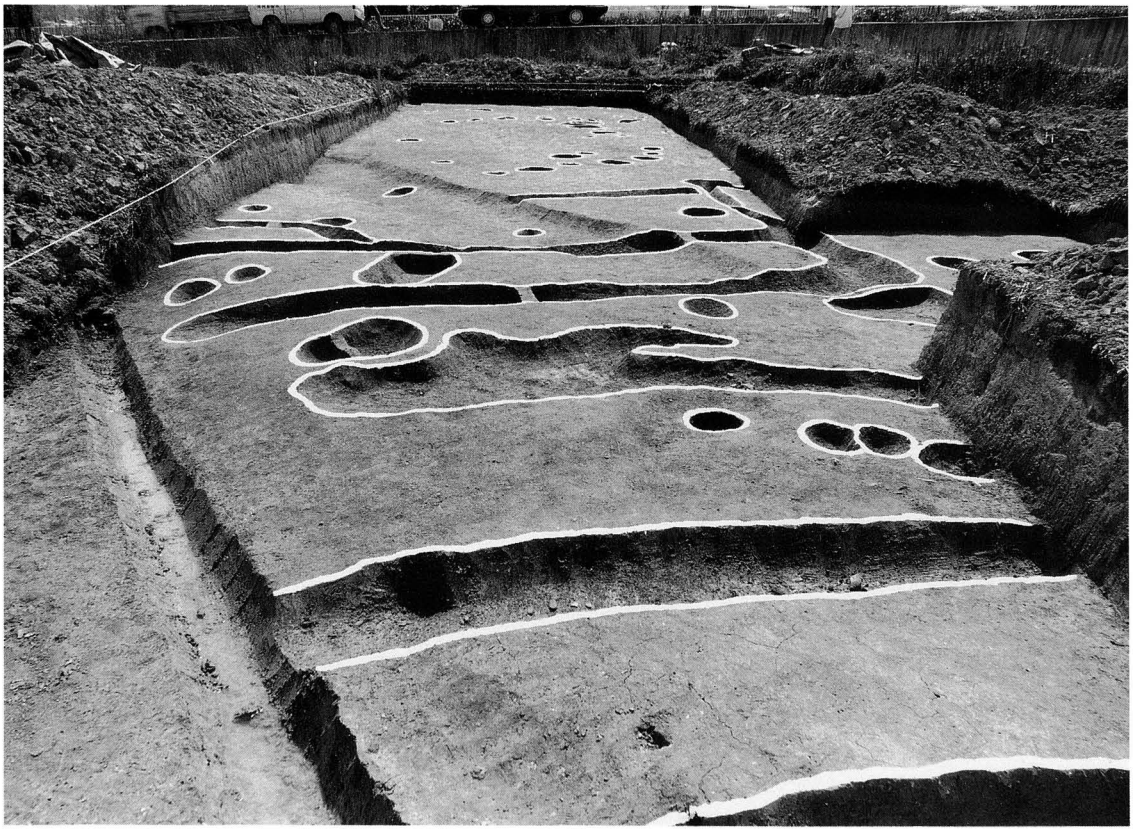
61


58

包含層（55、56、58、61、62）



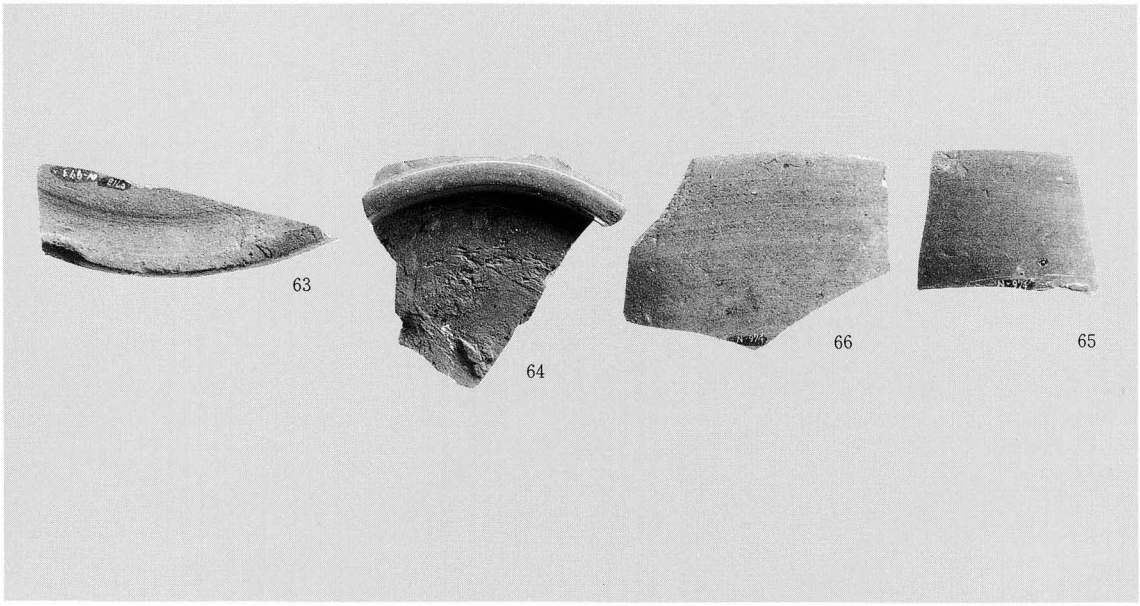
調査区全景（南から）

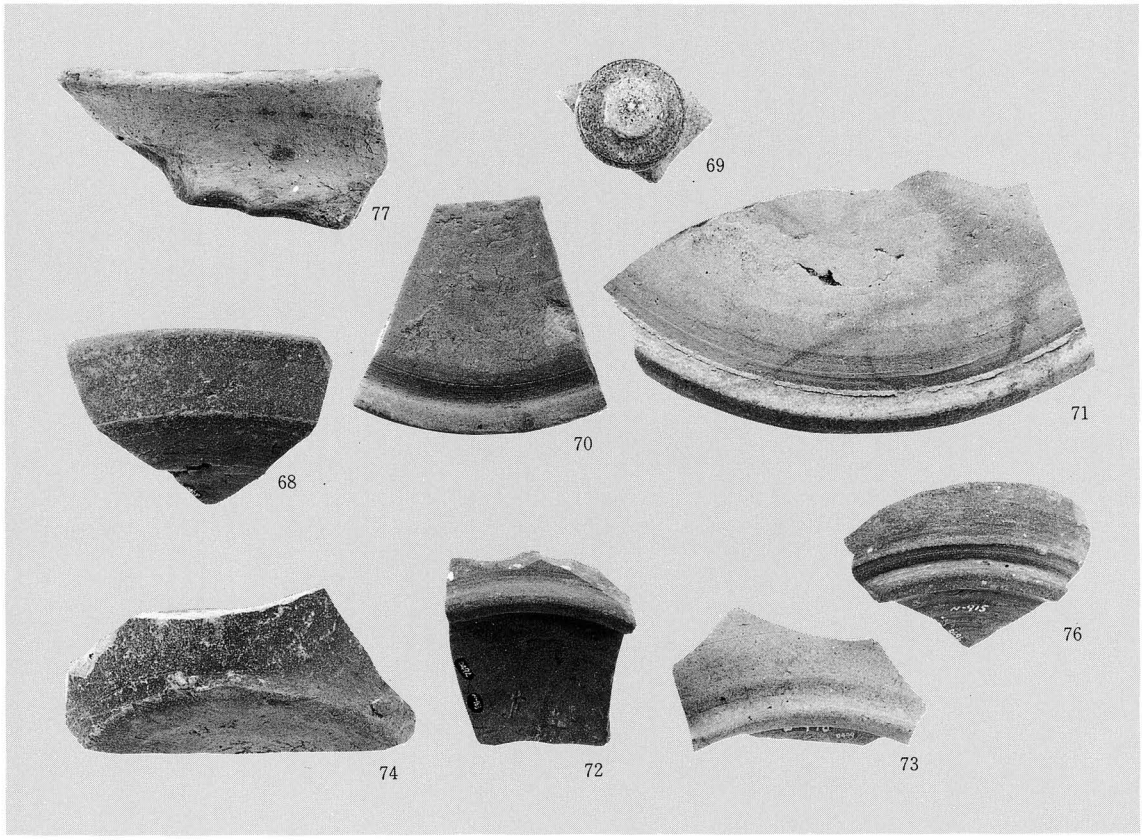


調査区全景（北から）

建物（東から）

溝群（東から）





溝1・2（63～66）、包含層（68～74、76、77）

河内長野市遺跡調査会報 I

1989年 3 月

発行　河内長野市遺跡調査会
　　河内長野市西代町12－46

印刷　（株）　中島弘文堂印刷所